

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【総括】

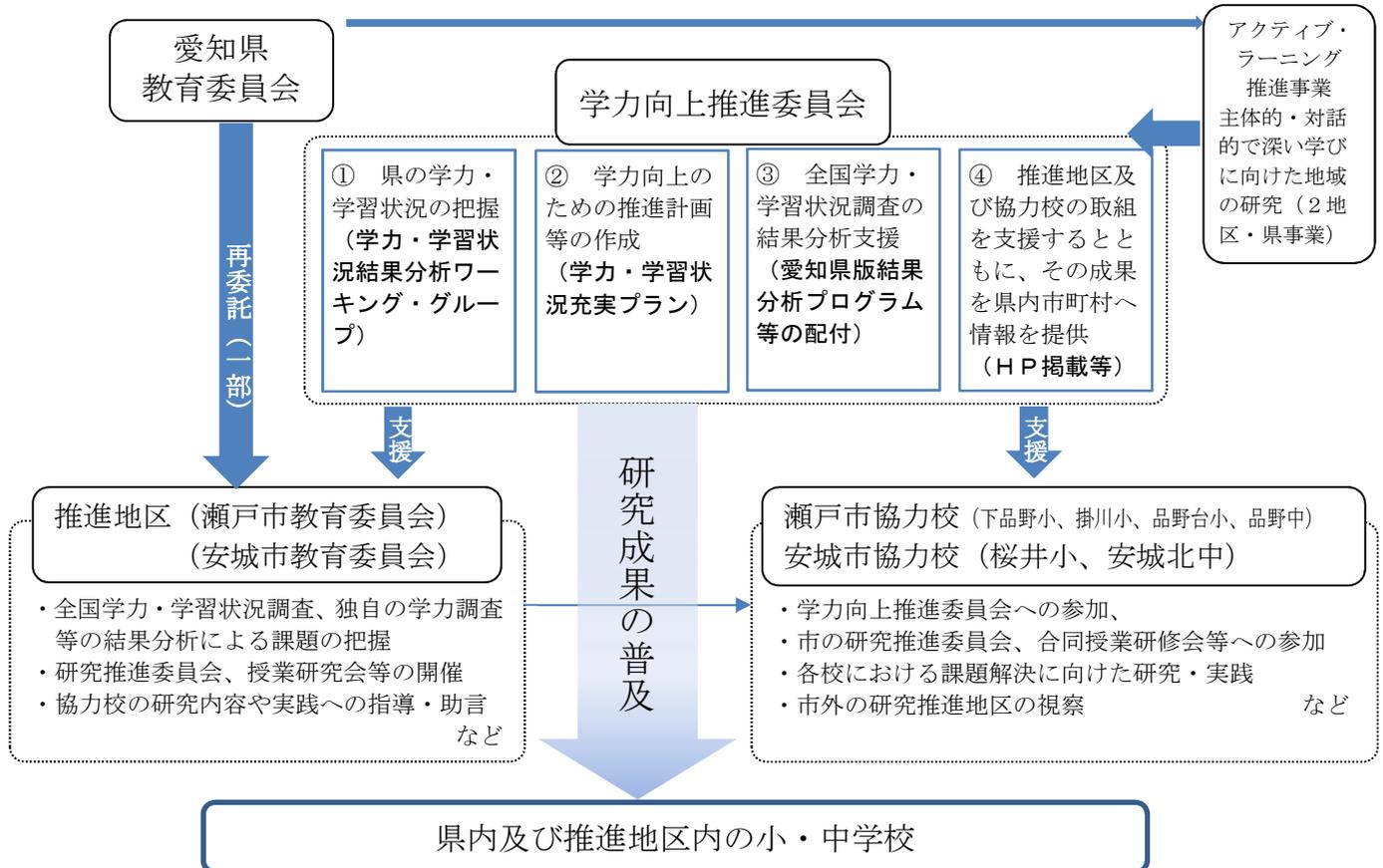
都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
瀬戸市	品野中学校	253
瀬戸市	下品野小学校	443
瀬戸市	品野台小学校	85
瀬戸市	掛川小学校	34
安城市	安城市立桜井小学校	856
安城市	安城市立安城北中学校	835

○ 実践研究の内容

(1) 推進地域としての体制の整備

県は、本事業の推進地域として、下のような体制を整備し、学力定着に課題を抱える学校への支援に関する調査研究を進めた。



(2) 県の学力・学習状況の把握

県教育委員会義務教育課と県総合教育センター合同で、学力・学習状況結果分析ワーキング・グループを組織し、全国学力・学習状況調査の問題及び結果の分析、それらを踏まえた指導改善のポイントの策定を行った。

(3) 愛知県学力向上推進委員会の設置と推進計画等の作成

愛知県学力向上推進委員会（委員会構成：大学院教授、県PTA連絡協議会役員、県生涯学習関係機関主査、推進地区教育委員会指導主事、協力校代表校長など）を組織し、協議を通じて、実践地区の取組に対する指導助言を行った。

加えて、学力向上のための推進計画である「学力・学習状況充実プラン」について、実効性のある支援となり、積極的活用が図られることをめざして、内容、まとめ方、配付方法等について協議を行った。

○ 第1回学力向上推進委員会（10月）

- ・「学力・学習状況充実プラン（小学校版・中学校版）」の構成・配付計画及び内容について検討
- ・推進地区の取組状況について検討
- ・アクティブ・ラーニング推進事業の取組状況について検討

○ 第2回学力向上推進委員会（2月）

- ・「小・中学校版学力・学習状況充実プラン」について報告
- ・「学力・学習状況の充実に向けたガイドライン」の検討
- ・推進地区（瀬戸市・安城市）の報告書について検討
- ・アクティブ・ラーニング推進事業の取組状況について検討

<委員会で確認した主な事項>

- ◆ 「改善の指針」について、カリキュラム・マネジメントの意識を地域との連携のみならず、教科間の連携や教科横断的授業など、一人一人の教師が意識して取り組むよう助言した。
- ◆ 本調査研究の推進地区、協力校の報告の内容については、新学習指導要領の移行期間であることを踏まえ、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成する取組とすることや、市が行った授業力向上のための研修会、小・中が連携した取組、学校と家庭をつなぐための市の取組について焦点を絞ってまとめ、全県に広めていくよう助言した。

(4) 愛知県版結果分析プログラム（9月配付）

各地区が地域の実情や課題に即した学力向上推進計画を策定するには、市町村ごと、学校ごとに結果を分析し、児童生徒のそれぞれの実態を把握することが必要である。それらの目的に資するため「愛知県版結果分析プログラム」（学校版・市町村教育委員会版）を作成し配付した。また、結果分析プログラムの使い方や作成した帳票の分析方法をまとめたマニュアルも同時に配付した。

(5) 学力・学習状況充実プラン（小学校版・中学校版）（11月～配付）

小学校・中学校それぞれの調査結果から明らかになった課題や課題解決のための授業改善のポイント、各設問の正答率から明らかになった個別の課題とその改善の方向性をまと

め、県内全小中学校に配付した。

(6) 「授業アドバイスシート」(学力・学習状況充実プランと同時に配付)

明らかになった課題解決のための具体的な取組のポイントや授業アイデア、授業で活用できるプリント等を作成し、県内全小中学校に配付した。

(7) 「学力・学習状況の充実に向けたガイドライン」(3月配付予定)

過去3年間の全国学力・学習状況調査の分析から明らかになった、課題解決の方向性と具体的な解決方法を示すリーフレットを作成する。その中で、次の3点を「改善の指針」として学力向上の取組を呼び掛けていく。

改善の指針Ⅰ 「知識・技能の定着を図り、自ら課題を解決できる「思考力・判断力・表現力等」を育成しましょう」(授業改善)

改善の指針Ⅱ 「児童生徒の実態を全職員で把握し、カリキュラム・マネジメントの充実を図りましょう」(学校体制づくり)

改善の指針Ⅲ 「小・中学校、家庭、地域が一体となった教育活動を推進しましょう」(地域連携の推進)

(8) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した研修

< 全県に向けた課題分析研修会(学校教育担当指導主事会) >

- ① 日 時 平成30年10月10日(水)
- ② 参加者 県内53市町村教育委員会指導主事、県関係者
- ③ 研修内容 「平成30年度全国学力・学習状況調査 愛知県の結果について」
 - ・各調査区分の分析結果及び授業改善について
 - ・児童(生徒)質問紙の質問項目における回答の状況について

< 各教育事務所単位の研修会 >

- ① 日時・場所等

期 日	時間	地 区 名	場 所	参加者	参加者数 (人)
11/26(月)	14:00~14:40	知多地区	知多教育事務所	担当指導主事	26
11/30(金)	15:30~16:20	愛日地区	三の丸庁舎	担当指導主事	34
12/3(月)	9:35~10:10	東三河地区	東三河県庁	担当指導主事	40
12/7(金)	9:30~10:00	西三河地区	西三河教育事務所	担当指導主事	44
12/14(金)	9:00~9:40	海部地区	海部教育事務所	担当指導主事	16
12/18(火)	10:00~10:40	中島・丹波地区	三の丸庁舎	担当指導主事	16

- ② 研修内容

- 「学力・学習状況充実プラン(小学校版)」 「授業アドバイスシート」を使った研修
- ・分析プログラムを使った地区の結果分析の仕方について
 - ・調査から見てきた課題と授業アドバイスシートについて、各地区の調査の結果を使って研修を実施
 - ・教科に関する調査の各調査区分の平均正答率による分析について
 - ・平成31年度全国学力・学習状況調査 中学校英語「話すこと」調査について

2. 推進地区における取組

推進地区においては、それぞれ次の取組を実施した。

<瀬戸市>

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

① 「中学校ブロック小中一貫教育」に基づく各校での現職教育の充実

今年度設定した中学校ブロックごとの重点努力目標を達成するために、各校の児童生徒の実態に応じた研究テーマを設定し、現職教育に取り組んだ。

② 「瀬戸の学び創造委員会」による分析と提案

ア 平成30年度全国学力・学習状況調査の問題分析

今年度の問題から全教師に取り組んでもらいたい問題を数題抽出し、問題の特徴と選んだ理由、概要、ねらい、学習指導の改善・充実のポイントについて分析を行った。

イ 結果分析

各校の結果について、前年度の比較を通じた分析を行い、中学校ブロックごとに小中合同で意見交換をした。さらに、ここでの意見を参考に、各校で学力向上に向けての今後の方針を作成し、冊子にまとめ、配付した。

③ 「瀬戸市基礎学力習得調査」の実施

小学校の早期段階で児童の基礎学力を把握し、今後の学習指導の工夫改善等に役立てるために、小学3、4年生対象に国語と算数で実施した。

(2) 家庭学習の充実

協力校を中心に、家庭学習の各学年における目安時間の設定、連絡帳を介した保護者との連携、また、中学校では、模範となる家庭学習ノートをホームページで紹介するなど家庭への啓発を進めた。

(3) 教師の指導力向上

① 教員一人ひとりへの働きかけ

ア 「わたしが創る瀬戸の学校」作成・配布

学校目標を達成するために教職員が自らの強みを生かし、一つの重点目標に向かって1年間のPDCAサイクルを回せるようなワークシートを作成した。

イ 「教員研修」の開催

全教員対象、経験別・役職別対象、そして協力校対象の研修会を複数回行った。

② 各中学校ブロックへの働きかけ

ア 「中学校ブロックごとによる小中一貫教育」の推進

平成32年度より全小中学校において、中学校ブロック別の小中一貫教育を進めていくにあたり、今年度は、各中学校ブロックにおいて、共通の「重点努力目標」を設定した。また、小中合同の職員会議や指導力向上研修の開催、相互授業参観や中学校の教員が小学生に指導する乗り入れ授業などを実施した。

<安城市>

「温かく、かかわりあいのある学校・家庭から心豊かな子どもを育む」を研究の目標に、以下の3つの取組内容をすすめた。

(1) 「自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営や支え合う環境づくり」

温かい学級経営や支え合う環境づくりの基礎を学ぶために、講師を招き研修を進めた。児童生徒が学級や家庭において、互いに認められ、役立つ存在であることなどを自覚できるよう、自己肯定感や所属感、自己有用感を高めるスキルを学んだ。

(2) 「目標を設定し、学び合う授業づくり」

講師を招き、60以上の授業公開をもとに、研修を行った。学び合いの授業づくりでは、温かい人間関係づくりや支え合う環境づくりのスキルを生かしながら、目標設定の仕方、まとめ方、学び合いの具体的な方法について学んだ。

(3) 「学校と家庭をつなぐICTの活用や読書の推進」

学校と家庭が連携して、家庭学習支援ソフト（eライブラリ）などのICTを生かした家庭学習ができるようにした。また学校司書と連携し家庭内読書の充実を図った。

3. 協力校における取組

<瀬戸市>

4校（品野中学校、下品野小学校、品野台小学校、掛川小学校）共通の取組

(1) 基礎基本となる知識技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

「学び合い」の先進校である品野中学校の取組を知るため、授業参観や研究協議会への参加を行った。また、「基礎学力定着委員会」を立ち上げ検討したり、ユニバーサルデザインの理念に基づいた視覚支援の在り方について検討を重ねたり、毎学期、漢字と計算の「がんばりテスト」を全学年で実施したりした。

(2) 家庭学習の充実

基礎基本となる知識技能を定着させるために、家庭学習についてのあり方を検討したり、家庭学習を通じた学習習慣の定着の大切さや模範となる取組を保護者に伝えたりした。

(3) 教員の指導力向上

指導力向上に向けたブロック内での合同研修、研究授業参観、乗り入れ授業を実施した。

<安城市>

・安城市立桜井小学校の主な取組内容

(1) 自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営について、講師を招き、教師の話し方や環境の作り方など、学級経営に生かせる具体的な研修を進めた。授業公開においては学級経営の部分においても講師に価値付けをしていただいた。

(2) 児童の実態を把握し、実態に合わせた目標を設定し学び合う授業づくりについて、講師を招き、授業研究会を行った。目標設定の仕方、学び合いの様子や具体的な方法、振り返りの仕方や内容について研修を進めた。

(3) ICTを活用する取り組みについて、家庭学習支援ソフトを普及させ、自主的に家庭学習に取り組む習慣を身に付けさせた。

・安城市立安城北中学校の主な取組内容

(1) 講師を招いて研修会を実施し、教科の域を超えて、自己肯定感や自己有用感を柱に教師が互いに授業や学級経営について話し合い、生徒のよさを認める場面の設定・具体的方法について検討し、研修を進めることで指導力向上に努めた。

- (2) 講師を招いて授業検討会を行い研修をすすめ、生徒の思考を軸にした単元構想のもと、生徒の主体性を重視し、教師支援(課題設定・発問・板書・座席表・ふり返り等)を検討し、対話活動を通して深い学びに至る授業づくりの研究を展開した。
- (3) 家庭学習力を高めるため、家庭学習支援ソフト（eライブラリ）の普及に努め、家庭学習の充実を図った。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

各地区、協力校における取組の成果については、次のとおりである。

<瀬戸市>

(1) 基礎基本となる知識技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

中学校ブロックで学力向上を目標に全教職員で検討する機会を得たことは大きな成果である。また、授業改善に向け、各校がこの一年取り組んだことは、子どもたちや職員に随分定着してきた。

(2) 家庭学習の充実

学校評価では、家庭学習に関する項目において、児童・保護者ともに昨年度より伸びを示した。一方、全国学力・学習状況調査では、決められたことはできるものの、自主的・主体的に取り組むことが苦手だという結果となった。「取り組みたくなる家庭学習」そして「効果的な家庭学習」について追求し、児童生徒の自学自習の取組へつなげたい。

(3) 教員の指導力向上

実際に各校で交流を行い、その取組を目にすることは教員全員にとってよい刺激となった。また、現職教育として学力向上を掲げ、学校体制で授業改善に取り組めたことも大きな成果である。

<安城市>

(1) 講義や協議会などを繰り返し、学級経営に対する職員の意識の向上を図ることができた。

また、生徒の自己肯定感や所属感、自己有用感が高まった。

(2) 学び合う授業づくりについて、子どもや教師の学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた。

(3) ICTを活用し学習する機会を増やし、家庭学習の充実を図ることができた。

2. 実践研究全体の成果

推進地区の取組の成果については、次のとおりである。

<瀬戸市>

小中一貫教育を推進する上で、学力向上への取組は大きな課題であった。今回、研究の機会をいただき、中学校ブロックで共有の目標を持ち、それに向かって各校が研究、改善を進めることができたことは大きな成果である。今回の研究の成果の検証として取り組んだCRTの結果としてはいまだ課題を多く含んでおり、継続した取り組みで成果を得て行きたい。

<安城市>

(1) 取組内容①「自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営や支え合う環境づくり」について

→ 学級経営・支え合う環境づくりについて、職員の意識の向上を図ることができ、子どもの意識の高まりも見られた

11回にわたり講師を招き指導をいただき、子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの手立てを得ることができ、支え合う温かな学級集団づくりに対する職員の意識を向上することができた。それが日々の学級経営に生き、子どもが自己を肯定的に見つめることができる意識の高まりにつながった。

(2) 取組内容②「目標を設定し、学び合う授業づくり」について

→ 子どもや教師の学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた

学び合う授業について、合計63の授業を公開し講師から指導を受けた。研修を進めていくなかで、学び合いの授業の形が学校全体に浸透してきた。また、授業後に協議会をもつたうえで指導を受ける場を繰り返し設けたことで、学び合う授業のよさを教師が実感し、自信をもって次の授業に向かうことができた。たくさん教師が授業を公開するなかで、授業を受けた子どもたちもは学び合うことのよさを繰り返し実感できた。

(3) 取組内容③「学校と家庭をつなぐICTの活用や読書の推進」について

→ ICTの活用や読書の推進を図ることができ、自宅でもICTを使って学習する機会を増やすことができた

ICTを生かした家庭学習に向けて、各校教師に配付された各PCに家庭学習支援ソフトを入れ、授業や宿題等で簡単にプリントや教材提示ができるようにした。また、各校のホームページに家庭学習支援ソフト(eライブラリ)のバナーを設け、自宅からスマートフォンやPCで学ぶ機会を設けた。教師にとって身近にソフトがあるため、授業や宿題などでもICT利用が増え、同時に昨年度までほとんど利用のなかった児童生徒の自宅でのICT利用回数や時間が大幅に増えた。また、特別支援学級の児童生徒が学年をまたいで学習できたり、不登校の児童生徒が学校に登校するきっかけとなったりするなど、一人一人の支援にも役立つ成果がみられた。

また、図書館との連携し、安城市の各校に配置されている学校司書を介して、家庭からインターネットで図書館の本を借りることができるシステムを伝えたり、本を読んだ経験を生かして、本を紹介する大会(ビブリオバトル大会)について伝えたりして、読書活動の推進を図った。しかし、読書活動の推進については、本年度は啓発に留まり、読書時間が増えた等のデータによる成果は得られなかった。

3. 取組の成果の普及

推進地域では、協力校で取り組んだ実践内容を、市教務主任会や要請のあった学校で報告会を実施するなど、教員の学力向上対策への意識付けを図った。

また、指導主事による学校訪問の際に、協力校で取り組んだ実践内容を他校に紹介し、学力向上の対策について共通認識に努めた。

愛知県学力向上推進委員会において有識者の意見を得ることで、「学力・学習状況充実プラン」

が県内の各校で活用しやすい内容になった。また、推進地区の担当者が、愛知県学力向上推進委員会の構成員であったため、委員会で協議された内容が推進地区や協力校ですぐに活用できる体制ができたことも本調査研究の成果である。

県は、推進地域の取組として、平成31年度は「学力・学習状況充実プラン」を策定し県内の市町村や学校に示した。小学校・中学校それぞれの調査結果から明らかになった県内小中学校の課題や課題解決のための改善の方向性をまとめた。その中で、推進地区のICTの取組をもとに、「ICTを適切に活用し、学習活動の充実を図ろう」と方向性を示し、授業での効果的なICTの活用や、児童生徒の情報活用能力育成、論理的思考力の伸長を提案することができた。これらも、愛知県学力向上推進委員会で推進地区及び協力校の取組について協議してきた成果である。

加えて、「学力・学習状況充実プラン」に掲げた課題解決のための取組を実践した例として、3月末には、本調査研究の推進地区や協力校及び「アクティブ・ラーニング推進事業」の実践校の取組を義務教育課Webページで紹介していく。

次年度は、県内の小・中学校における課題解決に向けた取組について、更に研究を進め、学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援の在り方を明らかにしていきたい。

推進地区の成果の普及については、次のとおりである。

<瀬戸市>

- ・「わたしが創る瀬戸の学校2019」を作成し、全教職員に配布する。
- ・4月25日（木）に、市内全教職員を対象とした学力向上に向けた研修会を開催する。
- ・教務主任者対象に、定期的に研究の進捗状況や成果を報告する機会をもつ。

<安城市>

- ・研究協力校の学校公開日を設定し、広く研究の内容を情宣する機会をもつ。
- ・教務主任者対象に、定期的に研究の進捗状況や成果を報告する機会をもつ。

○ 今後の課題

県として示した三つの改善の指針が各学校で生かされるよう、本年度の推進地区や協力校、「学力充実プラン推進事業」の実践校の取組の効果を更に検証し、その成果を紹介していく。

とりわけ、改善の指針I「知識・技能の定着を図り、自ら課題を解決できる『思考力・判断力・表現力等』を育成しましょう」の具体的な取組については、「授業アドバイスシート」等でより実践的・効果的な指導改善例を示すとともに、それに対する検証を協力校の様子や全国学力・学習状況調査の結果をもとに検証していきたい。また、本県の事業である「アクティブ・ラーニング推進事業」においても、協力校を設定し、成果を実践・検証していく予定である。

さらに、県や市町村がいかに支援していくことが児童生徒の学力定着につながるかについて、実践研究を重ね、更に市町村の優れた取組を広く県内に還元していくことで、本県の児童生徒の学力向上につなげていきたい。

<瀬戸市>

本市はこれまで伝統として、各校の独自性を大切にして教育活動を進めてきた。しかし、今回各中学校ブロックにおける小中一貫教育を推進するにあたり、共通の目標を掲げ、足並

みをそろえて教育活動を行うことになれておらず、戸惑うことが多かった。今後は、9年間を見通した系統的・横断的な学習活動をさらに推進し、育成すべき資質・能力の実現に向けた学習方法や指導方法の改善に努めていきたい。

<安城市>

各取組内容について、課題をもってすすめていきたい。

- (1) **取組内容①自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営や支え合う環境づくり**
自己肯定感や所属感、自己有用感の高まりを、客観視できるデータのもとで手立てを打ちながら分析し、成果を広げていきたい。
- (2) **取組内容②目標を設定し、学び合う授業づくり**
学び合いの授業実践を広げ、共有できるようにしていきたい。
- (3) **取組内容③学校と家庭をつなぐICTの活用や読書の推進**
ICTを活用した家庭学習や読書活動が、学校で生きるような取組を進めたい。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	瀬戸市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

小中一貫教育による学力向上を目指して

～中学校ブロックで行う、子ども同士、家庭、教職員の協働～

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

本市は、協力校で研究実践してきた学び合いの授業を推進しており、児童生徒が自ら課題を持ち、仲間と支え合いながら解決していく過程で生まれる新たな自分との出会い・発見を大切にしている。しかし、学力向上には、学び合いと知識・技能の定着の両輪が必要だと考え、基礎・基本となる知識・技能の定着を図る主体的・対話的で深い学びを生み出す授業を目指していく。

(2) 家庭学習の充実

「ものづくり」の町として栄えた本市は地域と学校の結びつきが強く、地域学校協働に力を入れていることから、家庭や地域の支援は欠かせないものとなっている。しかし、市全体を見てみると、学力や学習についての地域差があることは否めない。そこで、家庭学習についてのあり方を検討し、学力向上の一助となる取組を行っていく。

(3) 教員の指導力向上

児童生徒の学力の向上には、教員の授業力、そして指導力向上が欠かせない。本市では、これまで、教員一人ひとりにスポットを当て、役職者、担当者、そして経験者対象の研修等を実施してきた。今回、小中一貫教育の推進を受け、全教職員、そして中学校ブロックに対して、組織としての研修の機会をもつこととする。これにより、9年間を見通した切れ目のない教育を実践できる教員の育成を図っていく。

2. 研究課題への取組状況

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

①「中学校ブロック小中一貫教育」に基づく各校での現職教育の充実

今年度設定した中学校ブロックごとの重点努力目標を達成するために、各校の児童生徒の実態に応じた研究テーマを設定し、現職教育に取り組んだ。以下に取組の例を挙げる。

◇水野中ブロック重点努力目標

「夢を持ち、社会を『生きぬく』ことのできる、実践的な態度を備えた『人』を育てる」

◇具体的な取組

- ・「水中ブロック生活目標」「水中ブロック学習目標」に基づいた指導を進める。
- ・小中教職員同士の情報共有と共通理解を図る。
- ・地域性を生かした教育活動を展開する。

◇各校における現職教育の研究テーマ

水野中学校 「教師力の向上を目指して」

水野小学校 「深く考え、自ら学ぶ子の育成」

西陵小学校 「よく考え、学び合い、実践する子」

②「瀬戸の学び創造委員会」による分析と提案

ア 平成30年度全国学力・学習状況調査の問題分析

今年度の問題から全教員に取り組んでもらいたい問題を数題抽出し、問題の特徴と選んだ理由、概要、ねらい、学習指導の改善・充実のポイントについて分析を行った。

イ 各校における調査問題への取組

すべての調査問題の解答に教員が取り組むことが理想ではあるが、少なくとも抽出された問題の解答に取り組むよう促し、各校の現職教育の機会などに実施した。

ウ 結果分析

各校の結果について、前年度の比較を通じた分析を行い、中学校ブロックごとに小中合同で意見交換をした。さらに、ここでの意見を参考に、各校で学力向上に向けての今後の方針を作成し、冊子にまとめ、配布した。

③「瀬戸市基礎学力習得調査」の実施

学力向上のために、小学校の早期段階で児童の基礎学力を把握し、今後の学習指導の工夫改善等に役立てるために、10月から12月にかけて実施した。

ア 対象学年 小学校3年生、小学校4年生

イ 出題内容 国語…漢字の書き取り、語句の意味、簡単な読み取り等30問
算数…計算を中心とし、簡単な文章題等30問

ウ 成績処理 各校から回収した得点を分析し、「市全体の各教科の平均点」「市全体の各教科の得点分布」「市全体の各教科の中央値」を各校に通知した。

(2) 家庭学習の充実

全国学習状況調査の結果、「家で、学校の宿題をしていますか」という問いに肯定的な回答している割合が、小学校では、91.1%、中学校が82.4%と全国と比較しても、非常に高い結果となった。しかし、「家で、学校の予習・復習をしていますか」という問いに肯定的に回答している割合は、小学校が53.7%、中学校が54.2%となり、全国よりも低い結果となった。つまり、決められたことはできるものの、主体的に取り組むことが難しい傾向が見られる。

そこで、協力校を中心に、家庭学習の各学年における目安時間の設定、連絡帳を介した保護者との連携、また、中学校では、模範となる家庭学習ノートをホームページで紹介するなど家庭への啓発を進めた。

(3) 教師の指導力向上

①教員一人ひとりへの働きかけ

ア「わたしが創る瀬戸の学校」作成・配布

教員研修の手引きとして毎年作成し、配布している。昨年度、各校の利用度や要望を調査した結果、「あまり役に立たなかった」という意見が半数を占めた。そこで、今年度は本市の学校教育に関わる基本施策や主な事業を明示し、それが各校の学校教育目標につながることを図式化した。また、この学校目標を達成するために教職員が自らの強みを生かし、一つの重点目標に向かって1年間のPDCAサイクルを回せるワークシートを作成した。

イ「教員研修」の開催

i) 全教員対象

5月17日(木) 「学級経営力をたかめる」 講師：愛知教育大学 鈴木健二氏

8月24日(金) セト・ティーチャーズ・アカデミー2019

「(こども×せんせい) ×まち=せとのみらい」 講師 東京大学大学院 牧野 篤氏

ii) 経験別・役職研修

8月1日(水) 2年目教員研修「授業研究の進め方」

講師：愛知教育大学附属名古屋中 近藤義晃氏

7月28日(金) 学校経営研修「キャリア教育を軸とした小中一貫教育」

講師：京都市立京都大原学院 石飛 聡氏

8月24日(金) 初任者研修「子ども同士のつながりを深める授業をめざして」

講師：教育コンサルタント 大西貞憲氏

iii) 協力校対象(別紙 協力校報告書参照)

②各中学校ブロックへの働きかけ

ア「中学校ブロックごとによる小中一貫教育」の推進

本市では、平成32年度より全小中学校において、小中学校が切れ目のない9年間の教育を展開できるよう、8中学校ブロック別の小中一貫教育を進めていくこととしており、各中学校ブロックにおいて準備を進めている。その一環として、今年度は、各中学校ブロックにおいて、共通の「重点努力目標」を設定した。

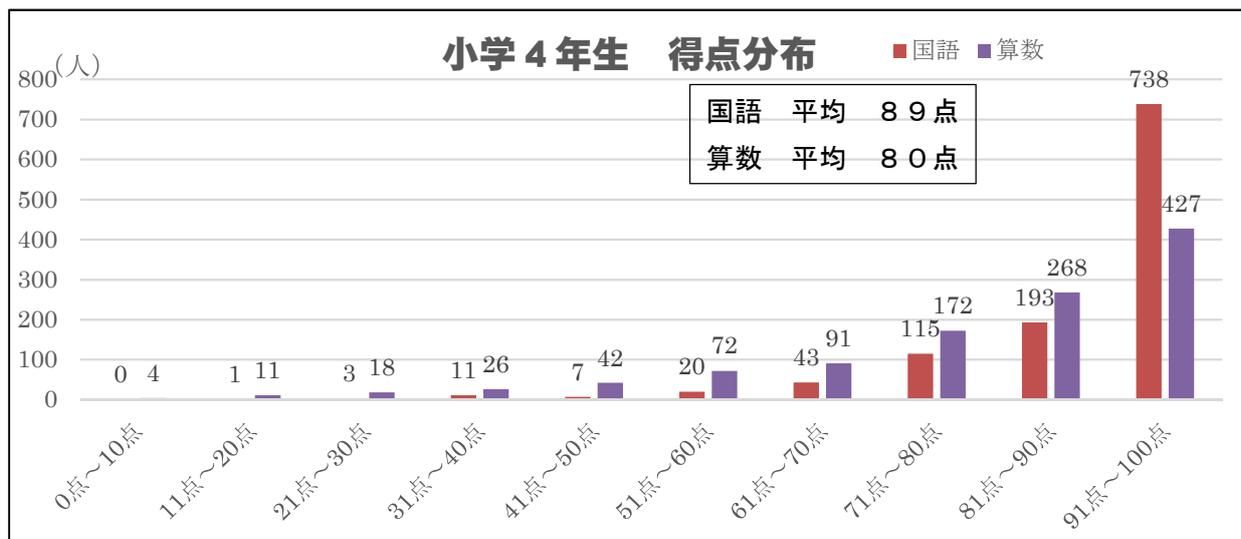
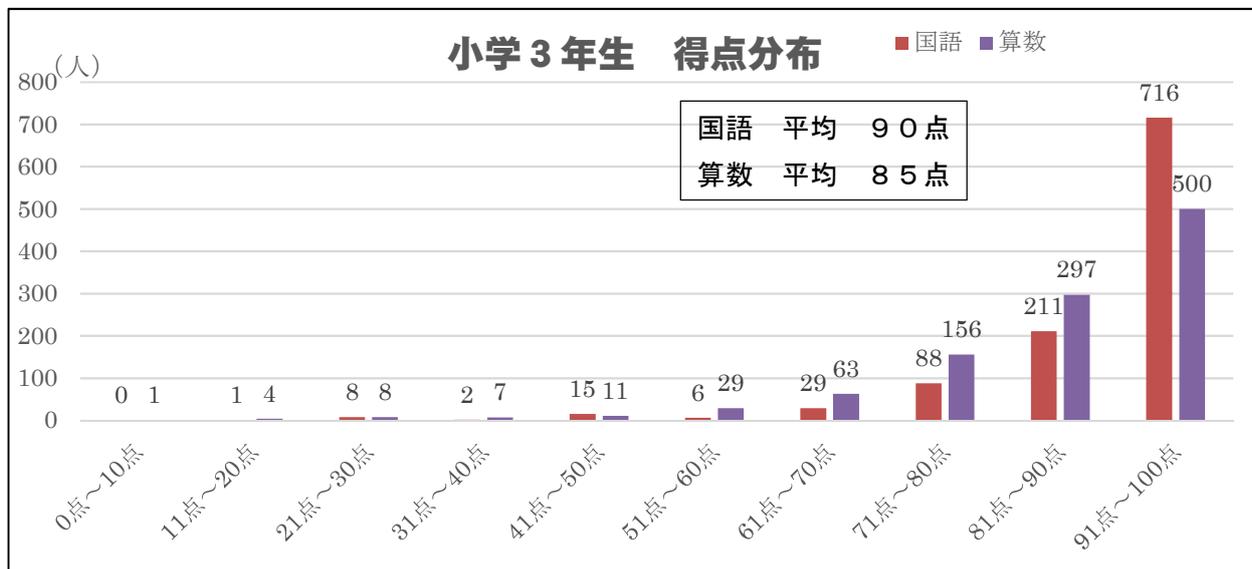
また、小中合同の職員会議や指導力向上研修の開催、相互授業参観や中学校の教員が小学生に指導する乗り入れ授業などを実施した。特に、外国人児童生徒が多く在籍し、多くの問題を抱えているブロックでは、合同職員会議のみならず、分科会を組織し、よりきめ細やかな教育活動を展開できる体制を整えた。また、乗り入れ授業では、中学校の美術教員が、小学生に彫刻刀の使用法を指導したり、小学校の栄養教諭が中学校の家庭科の時間に食育について指導したりするなど今後のさらなる可能性を模索し、より専門的な授業や児童生徒の実態を着実につかんだ支援を行えるようにしている。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 主体的・対話的で深い学びを生み出す授業の工夫

①「瀬戸市基礎学力習得調査」の実施

今年度の結果は以下の通りである。



この結果から、中位層と下位層に基礎・基本の定着に課題が見られる児童が一定数いることが分かる。いかに中・下位層の学力を向上させるかが大きなカギとなる。

②「瀬戸の学び創造委員会」による分析と提案

学校評価アンケート（抽出校）における「授業の内容がよく分かっている」という項目において、肯定的な回答をした結果は、以下の通りである。

児童生徒 82%（昨年度 84%） ・ 保護者 81%（昨年度 81%） ・ 教員 84%（昨年度 81%）

この結果から、各校における学力向上に向けた授業改善の取組について、教員と児童生徒・保護者の意識に差があることが明らかとなった。新学習指導要領の実施に向ける教員の思いや実践が、結果となって児童生徒や保護者まで浸透できていないと考える。

(2) 家庭学習の充実

学校評価の結果、学習への自主的な取組や家庭学習習慣の定着に肯定的な回答をした児童生徒は78%（昨年度 74%）であった。学校評価の項目に関連する項目が存在する学校については改善が見られる。学校として、家庭教育の在り方や学習における家庭との連携について意識することが家庭学習の充実につながると考える。

(3) 教員の指導力向上

①「わたしが創る瀬戸の学校」作成・配布

昨年度、各校の利用度や要望を調査した結果、「あまり役に立たなかった」という意見が半数を占めた。そのため、その意見を反映させ、今年度版を作成した。

各校の教務主任から、「何を、どのように、どうやって取り組めばよいか明瞭になり利用しやすかった。」「1年間利用できる形式だったため、しまい込むことがなくなった。」などの意見を得た。

②「中学校ブロックごとによる小中一貫教育」の推進

中学校ブロックにおける小中のつながりを意識することが定着し、教職員間の交流や合同会議、研修を通して、9年間を見通した児童生徒の成長を考える機会が増加した。また、各会合での情報交換や研修を通して、小中一貫教育を推し進める活力を生み出すことができた。

反面、小学校と中学校における教職員の価値観や考え方の違いが浮き彫りとなり、意見の衝突やすれ違いなど一つにまとまるのが困難な時もあった。

③「教員研修」の開催

◇研修の感想より

- ・ 子ども同士のつながりを意識して、日々の授業を行うことが大切だと分かった。教員の立ち位置や発言をもう一度考え直したい。
- ・ 大変楽しくとても勉強になった。あっという間に時間が過ぎ、自分も楽しく授業がしたいなと思い、1つでも実践したい。

◇セト・ティーチャーズ・アカデミー2019のアンケート結果（肯定的意見）

午前 全体会 89% 午後 分科会 97%

瀬戸市が目指す教育の方向性と教員のニーズに沿った研修内容を企画することで、多くの教職員がよかった、とてもよかったという肯定的な感想を持つことができた。指導力を向上させたいという思いが教職員には強いことが改めて実感できた。

4. 今後の課題

本市はこれまで伝統として、各校の独自性を大切にして教育活動を進めてきた。しかし、今回各中学校ブロックにおける小中一貫教育を推進するにあたり、共通の目標を掲げ、足並みをそろえて教育活動を行うことになっておらず、戸惑うことが多かった。一方、各校の特色やこれまでの実践をお互いに認めながら、目の前の子ども達の成長を一番に考え、共通の目指す子ども像を作り上げることができた。今後は、9年間を見通した系統的・横断的な学習活動をさらに推進し、育成すべき資質・能力の実現に向けた学習方法や指導方法の改善に努めていきたい。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成30年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

推進地区名	安城市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

(1) 各教科における本市小中学校の現状(平成29年度)

本市の各教科の平均正答数・正答率は、小学校では、国語A・B、算数A・Bともに全国平均より下回っており、分布は下位が多く、上位が少なかった。また、正答数0問の児童が全国平均の倍近くいた。中学校では、国語A・Bの正答率は全国平均とほぼ同等で、数学A・Bはともに全国平均を上回っていた。

各教科の調査内容を分析すると、小学校では国語について、目的や意図に応じて必要な情報を読んだり(国語A)、文章構成を考えたり(国語B)する力が身に付いていないことが明らかになった。算数では、文章問題を図式化したり(算数A)、表を使ったり(算数B)するなど、様々な場面で図や表を用いて活用する力が身に付いていないことが明らかになった。

また、小学校では国語・算数全てにおいて無回答率が高く、国語では「書くこと」、算数では「文章問題」に対して粘り強く回答していく力の足りなさが見られた。中学校では、国語Aにおいて、文脈の中から語句を適切に書いていく力、数学Aにおいて、表をもとに解答を進めていく力が身に付いていないことが明らかになった。

(2) 質問紙調査の結果における本市小中学校の現状(平成29年度)

生活や経験についての質問紙調査の結果から、自己肯定感や人とのかかわりにつながる回答については、小中学校共通して「先生がよいところを認めてくれる」「学級やグループで話し合ったりする活動」などの回答率が低かった。家庭では小学校で4時間、中学校で3時間以上テレビやビデオ・DVDを見聞きしており、家族とともにふれあう時間が削られている様子が見えた。

授業の様子からは、小中学校共通して、学習の目標とまとめを書くこと、グループで話し合い、考えを深めたりまとめたりすることの数値の低さが明らかになった。また、家庭学習については、小学校では自宅での学習が1時間以下であり、家庭学習が習慣化されていないことが分かった。加えて小中学校に共通して、家庭において自分から計画を立てて勉強する数値が低く、家庭学習を自主的に進める力の足りなさが見えてきた。

(3) 学力と学習状況の相関関係における本市小中学校の現状（平成29年度）

学力と学習状況の相関関係をみると、家庭とのつながりに関しては、小中学校共通して朝食を毎日食べ、自宅で計画を立てて勉強する児童生徒ほど正答率が高く、中学校では家の人と学校での出来事について話す生徒の正答率が高かった。反面、自宅でテレビゲームを4時間以上している児童生徒ほど正答率が低いことが明らかになった。

学校との関係性では、小中学校共通して、授業で学んだことをほかの学習や普段の生活に生かしていると答えた児童生徒ほど正答率が高く、反面、学級みんなで何かをやり遂げ、うれしかったことが少ないと回答した生徒児童ほど正答率が低かった。また、家庭でも学校でも、読書が好きだと答えた児童生徒ほど、国語A・Bの正答率が高いことも明らかになった。

(4) 現状の課題から取り組むべき内容

(1) から (3) の現状から、喫緊の課題として取り組む必要があることを以下の3つにまとめた。

- ① 学級での所属感、自己有用感、認められる自己肯定感を高め、何事にも粘り強く、諦めないで取り組み、時代を生き抜いていくための環境をつくること。
- ② 温かいかわり合いのある授業構想のもと、目標を設定し、考えを仲間と深め、情報を文章や図表で表現してまとめる授業をし、生活にいかせる実感をもたせること。
- ③ 学校と家庭を温かくつなぐ媒介の一つとして、ICTを有効活用し、家庭学習支援ソフト（eライブラリ）を普及させ、学校と家庭がともに学びを促す環境づくりを進める。また、図書情報館との連携のもと、電子図書も含めた家庭での読書活動の普及に努め、読書による心の成長を促すよう啓発する。

(5) 課題を受けた研究の構想

① 平成30年度の安城市教育委員会の指導方針より

安城市教育委員会が平成30年度の指導方針で特に大切にしているのは以下の3点である。

- ・命の大切さを実感し、明るく元気に過ごすことができるたくましい体と、しなやかで折れない心を育てる。
- ・学び合いによる教育活動を推進し、自ら学び深く考え、主体的に行動する力を育てる。
- ・一人一人を大切にし、きめ細やかで適切な指導・支援に努める。

② 課題をもとにした研究の構想図

この指導方針にそった取組は、前述の課題の具体的な解決に直結するものと考えた。研究の目標、課題と取組について研究の構造図にしてまとめた。(次頁)

③「研究の構想図」

研究の目標

「温かく、かかわりあいのある学校・家庭から心豊かな子どもを育む」

めざす子ども像 <こんな子どもたちであってほしい>
自己肯定感や自己有用感に満ち、命を大切にできる子ども
仲間との学び合いを喜び、学びを深め合える子ども
ICTを活用しながら学びや読書に親しむ子ども

<学校としての支え>

子どもの居場所がある学級経営のできる教師
目標を設定し、学び合う授業ができる教師
ICTを活用し、学びを共有できる教師

<家庭としての支え>

子どもの自主性や粘り強さを育む家庭
様々なアプローチで読書のよさを実感する家庭
ICTを活用し学校とともに学びを支える家庭

29年度の学力・学習状況調査の課題に対して取り組みたいこと

(A) 温かな人間関係づくり、支え合える環境づくり

学級・家庭での自己有用感、所属意識、自己肯定感を高め、
温かな人間関係や、学校と家庭が支え合える環境をつくる。

<学 校>

(B) 対話的・主体的に学び合う授業づくり

目標を設定し考えを仲間と深め、学んだことを表現してまとめる授業をし、
生活にいかせる実感をもたせる。

<家 庭>

(C) 家庭生活における学習機会の充実

ICTを有効に活用しながら、家庭での学習習慣の確立や読書の推進を図り、
家庭学習の自主性を向上させる。

課題に対する取組の重点項目

自己肯定感や所属感を高める環境づくり
目標を設定し、学び合う授業づくり
ICTを活用し学校と家庭をつなぐ取り組み

学校と家庭をつなぐ家庭学習教材の開発
図書館との連携による家庭読書の充実
温かい家庭を育むサポートプランの提供

2. 研究課題への取組状況

(1) 平成30年度の3つの主な取組内容について

本年度の取組内容を以下の(A)から(C)にまとめた。

取組内容(A)

「自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営や支え合う環境づくり」

温かい学級経営や支え合う環境づくりの基礎を学ぶために、講師を招き研修を進めた。児童生徒が学級や家庭において、互いに認められる存在であることや役立つ存在であることなどを自覚できるように、研修では、自己肯定感や所属感、自己有用感を高めるスキルを学んだ。

取組内容(B)

「目標を設定し、学び合う授業づくり」

講師を招き、授業検討会を行った。学び合いの授業づくりでは、温かい人間関係づくりや支え合う環境づくりのスキルを生かしながら、目標設定の仕方、まとめ方、学び合いの具体的な方法について研修を進めた。

取組内容(C)

「学校と家庭をつなぐICTの活用や読書の推進」

学校と家庭が連携して、家庭学習支援ソフト(eライブラリ)などのICTを生かした家庭学習ができるようにした。また図書館や学校司書との連携により家庭内読書の充実を図った。

(2) 平成30年度の実績

月日	活動内容	取組内容
8/1~	eライブラリ用学校ホームページのバナー作成 eライブラリ用児童生徒IDカード作成	(C)
8/2	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義 講師：愛知教育大学 加納誠司教授(安城市立桜井小学校)	(A) (B)
8/3	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講演の参加 講師：金沢大学 松本謙一教授(大阪市立泉尾東小学校)	(A) (B)
8/23	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義 講師：愛知教育大学 加納誠司教授(安城市立安城北中学校)	(A) (B)
8/27~	全国学力・学習状況調査、学力テストの結果について分析 今後の対策について検討・計画修正	(A) (B)
9/1~	eライブラリの学校での活用の推進 学校司書と連携した読書の推進	(C)
10/5	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 算数科指導員による学び合いの授業 講師：愛知教育大学 加納誠司教授(安城市立桜井小学校)	(A) (B)
10/9	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 算数科指導員による学び合いの授業をもとにした研修 講師：愛知教育大学 加納誠司教授(安城市教育センター)	(A) (B)

11/16	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 安城北中学校の社会科教員による学び合いの授業研修 講師：愛知教育大学 土屋武志教授（安城市立安城北中学校）	(A) (B)
11/30	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 桜井小学校全職員による学び合いの授業研修 講師：日本大学 黒田友紀准教授（安城市立桜井小学校）	(A) (B)
12/5	学級づくりのためのY Pプログラム研修参加 講師：横浜市教育委員会 土井純指導主事（横浜市立西前小学校）	(B)
12/14	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 安城北中学校2年生職員による学び合いの授業研修 講師：愛知教育大学 加納誠司教授（安城市立安城北中学校）	(A) (B)
1/28	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 社会科指導員による学び合いの授業研修 講師：愛知教育大学 土屋武志教授（安城市立丈山小学校）	(A) (B)
2/15	図書情報館における学校司書に対する読書啓発の講義・研修 名古屋大学 飯島玲生 情報学研究科特任助教（図書情報館）	(C)
2/18	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 桜井小学校全職員による学び合いの授業研修 講師：日本大学 黒田友紀准教授（安城市立桜井小学校）	(A) (B)
2/21	学び合う授業、学級経営や支え合う環境づくりに関する講義・研修 生活科指導員による学び合いの授業研修 講師：愛知教育大学 加納誠司教授（安城市立安城北部小学校）	(A) (B)

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 取組内容 (A)

「自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営や支え合う環境づくり」について

成果：学級経営・支え合う環境づくりについて、職員の意識の向上を図ることができ、子どもの意識の高まりも見られた。

11回にわたり講師を招き、学級経営・支え合う環境づくりについて講義をしていただいたり、実践をもとに指導をいただいたりした。子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの手立てを講師から得ることができ、支え合う温かな集団づくりに対する職員の意識を向上することができた。それが日々の学級経営に生き、子どもの自己を肯定的に見つめることができる意識の高まりにつながった。



写真1「講師による指導」

<取組内容 (A) の成果の把握 具体例>

大学教授等による複数回の講義では、学級経営や支え合う環境づくりについて繰り返し指導をいただいた。以下は、学校で共有できた講師の言葉の一例である。

愛知教育大学 加納誠司 教授

- ・自己肯定感の確立が未来を担う子どもたちには必要である。
- ・教師の学級づくりのなかで、自己肯定感の確立をすれば、それをもとに自己有用感が成立し、さらに強固な自己肯定感、自己実現につながる。
- ・教師の肯定的な「子ども観」こそ最も大切な教師の資質・能力である。

日本大学 黒田友紀 准教授

- ・子どもを大切にすることは、学級に自分の居場所があること。
- ・支え合っている関係性があれば、子どもはなんとか頑張ることができる。
- ・先生が「かっこいいね」ではなく、子どもがあの子（自分）「かっこいい」といえる学級づくりをしてほしいし、それが多くの先生方の授業で見られるようになってきた。

このように講師の先生から、毎回子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの手立てや、教師の日々の学級づくりについて評価をしていただくことで、「自分の意見を心置きなく言える場を学級の中でつくっていききたい」「たくさん子どもの声を聴きたい、学級経営を見直したい」などの教師の感想が見られた。このことから、教師の意識が向上し、自信をもって子どもと毎日向き合い、子どもも温かい学級経営の中で毎日を過ごすことができるようになってきたと考えた。

協力校の安城北中学校では、質問紙調査における自己有用感にかかわる項目について「自分にはよいところがある」という質問について肯定的な回答した生徒が4月と比べて1月では2.9ポイント増加した。また「先生はあなたのよいところを認めてくれますか」という質問に肯定的に回答した生徒は6.9ポイント増加した。このように、教員の意識の向上とともに子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感の高まりが見られる学校の状況が見えてきた。（詳細：様式3：協力校の報告）

（2）取組内容B

「目標を設定し、学び合う授業づくり」について

成果：子どもや教師の学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた。

学び合う授業について、合計63の授業を公開し講師から指導をいただいた。研修を進めていくなかで、学び合いの授業の形が学校全体に浸透してきた。また、授業後に協議会をもった上で指導をいただく場を繰り返し設けたことで、学び合う授業のよさを教師が実感し、自信をもって次の授業に向かうことができた。たくさん授業を公開するなか、子どもたちは学び合うことのよさを繰り返し実感できた。

<取組内容（B）の成果の把握 具体例>

本年度の9月～2月の間、学び合いを視点に、小学校で57授業、中学校で6授業が公開された。以下は授業公開において実践された学び合いの授業の一例である。

- ・小1生活「もっと楽しい秋ランドにするためにはどうしたらいいかな」
- ・小2生活「タイムマシーンでゴー！自分物語づくり。」
- ・小3社会「どうして三河万歳を残すのだろう」
- ・小4体育「失点を防ぐ作戦を考えよう」
- ・小5算数「みんなですっきり面積比べ」
- ・小6理科「地球の歴史を解き明かそう」
- ・中2道徳「夢を叶えるために必要なものはなんだろう」
- ・中2英語「ペア、スチューデントティーチャーで過去進行形の復習をしよう」
- ・中2社会「中部地方に住みたくなるキャッチコピーを考えよう」
- ・中3社会「市に提案する要望としてふさわしいものは何か」

※平成30年9月～平成31年2月の間、小学校で57授業、中学校で6授業が公開された。



写真2「公開授業の様子」

それぞれの授業では、講師に教師の授業について評価をしていただいた。以下は、大学教授等に各教師が授業について価値付けていただいた言葉の一例である。

愛知教育大学 土屋武志 教授

- ・子どもの集中が見られた、こんな授業がたくさんあることが大切。
- ・学び合いに全員が参画している。今後が期待できる。
- ・一斉授業ではここまで書くことはできない。子どもたち同士で刺激をし合うからこそ、これだけの振り返りができた。
- ・教師は子どもの根拠を整理する。すると子どもが授業をつくり出す。

愛知教育大学 加納誠司 教授

- ・子どもが自信をもって自分のよさや可能性を語り、友達同士で高め合っていた。
- ・自分を自分らしく友達に表現してもいい温かな空間があった。
- ・対象と対話し続ける子が見られた。これこそ深い学びにつながる。

日本大学 黒田友紀 准教授

- ・夢中で学び、グループの中で支えながら参加している子がいた。
- ・子どもの学びに添った声、トーンで教師が学びを進めていてよい。
- ・教師が全体とグループをうまくつないでいた。子どもが安心して学べる教室になっていた。

また、1つの授業を互いに見合う場面も設定し、教員による協議会も行った。授業公開をしたり、協議会に参加したりした教師は次のような感想を述べている。

「低学年でも似たような学び合いの授業を今度挑戦してみたい。」

「自分と違う考えに触れて刺激になった。考えを深めたり広げたりできる授業を取り入れていきたい。」

「グループワークは自分はあまりできていないところであるので、とても勉強になりました。」

このように、何度も学び合いの授業を実践したり、参観し合ったり、教授等に価値付けていただくなかで、学び合いに対する教師の意識の向上を図ることができ、自信をもって授業ができる学校の雰囲気が出てきた。また、学び合いの授業を受けて、子どもが学び合いのよさを実感する場面も多数見られた。以下、その事例について協力校の授業の事例をもとに述べる。

協力校の桜井小学校5年生の算数の面積の授業では、平行四辺形を移動させて長方形にして求める自分の考えを伝えたり、友達に認められたりするなかで面積を求め方を学んでいく児童が見られた。授業の振り返りに、児童は「たくさんの子がわたしの考え方を使って面積をもとめていたからほっとした」「Aくんの考え方は思いつかなかった。分かりやすいと思った」と記述するなど、学び合うことのよさを実感したことがうかがえた。



写真3 「学び合いの場面」

(詳細：様式3：協力校の報告)

協力校の安城北中学校では、授業に関する生徒の質問紙調査の数値が上がった。学習状況調査の質問紙における話し合う活動に関する項目について、調査の4月と比較して同生徒に1月に調査をしたところ、肯定的な回答をした生徒が18.5ポイント増加するなど、生徒の授業への意識の変化が見られてきた。

(詳細：様式3：協力校の報告)

(3) 取組内容C

「学校と家庭をつなぐICTの活用や読書の推進」について

成果：ICTの活用や読書の推進を図ることができ、自宅でもICTを使って学習する機会を増やすことができた。

ICTを生かした家庭学習に向けて、各校教師に配付された各PCに家庭学習支援ソフトを入れ、授業や宿題等で簡単にプリントや教材提示ができるようにした。また、各校のホームページに家庭学習支援ソフト（eライブラリ）のバナーを設け、自宅からスマートフォンやPCで学ぶ機会を設けた。教師にとって身近にソフトがあるため、授業や宿題などでもICT利用が増え、同時に昨年度までほとんど利用のなかった児童生徒の自宅でのICT利用回数や時間が大幅に増えた。また、特別支援学級の児童生徒が学年をまたいで学習できたり、不登校の児童生徒が学校に登校するきっかけとなったりするなど、一人一人の支援にも役立つ成果が見られた。

また、図書館との連携し、安城市の各校に配置されている学校司書を介して、家庭からインターネットで図書館の本を借りることができるシステムを伝えたり、本を読んだ経験を生かして、本を紹介する大会（ビブリオバトル大会）について伝えたりして、読書活動の推進を図った。しかし、読書活動の推進については、本年度は啓発に留まり、読書時間が増えた等のデータによる成果は得られなかった。

<取組内容（C）の具体例>

ICTを生かした家庭学習に向け、以下のような手順で事業を進めた。

- ①各校のホームページに家庭学習支援ソフト（eライブラリ）のバナーを設け、自宅からスマートフォンやPCで学ぶ機会を設ける。
- ②市内全教師に配付された各PCに家庭学習支援ソフトを入れ、授業や宿題等で簡単にプリントや教材提示ができるようにする。
- ③自宅から家庭学習支援ソフトに入ることができるよう、市内の全児童生徒にIDを発行しカードにして配付する。必要時に保護者会を開き活用方法を説明する。
- ④学校のコンピュータ室で家庭でのICT利用ができるようにサポートする。自宅にICTツールがない児童生徒の配慮からコンピュータ室の開放を行う。

教師の授業や宿題などでもICT利用が増え、各家庭においてパソコンやスマートフォン、タブレットなどからホームページにアクセスし、そこから家庭学習をする児童生徒が見られた。学校のホームページにも、自宅におけるICTを利用した家庭学習についての記事を書き、活用を促した。以下は学校のコンピュータから学校のホームページにアクセスして家庭学習支援ソフトを利用した授業の後、協力校がホームページにそのようすを載せた記事である。

「4年生がコンピュータを活用した授業を行いました」
家庭学習支援ソフト「eライブラリ」のドリル学習に取り組みました。学習したい教科や単元を選び、4年生のまとめとして繰り返し学習しました。家でもぜひ挑戦してみてください。このホームページの左側のバナーからログインできます。



家庭学習支援ソフトの活用によって、プリント作成等も便利となり、宿題として利用する教師も増えた。また、ホームページから学ぶ機会を授業の中で取り込み、それを家庭でのICT学習に生かす機会もたくさんもてるようになった。その結果、家庭で児童生徒がICTを使って積極的に学習する姿や、それを温かく見守る保護者の姿が以下のように報告された。また、特別支援学級の生徒の学年を変えて学ぶ姿や、不登校児童生徒へのアプローチの1つとしての成果も報告された。以下、教師や保護者の聞き取りから本年度のICTの取組の成果をまとめた。

「特にテスト前に学習履歴が多く残っており、積極的に取り組んでいる。」
「保護者会で周知したところ、多くの学習履歴が残るようになってきた。」
「小学校2年生が1年生の問題を保護者と学習した履歴が見られた。保護者も一緒に子どもと学習に取り組むきっかけ作りになった。」
「ほぼ毎日家庭学習に取り組んでいる6年生の児童がいる。学校ではあまり積極的に学習に取り組まないが、これによって保護者や本人に励ましてあげることができる。」
「不登校児童生徒にとって、1つ学習の機会が増えたため、教師の子どもへのアプローチの機会が1つ増えた。」
「中学校ではテスト期間中の放課後にコンピュータ室を開放し学習できるようにしたところ、たくさんの学習履歴が見られた。」
「中学校では、特別支援学級の生徒が学年を変えて学ぶ機会ができた。」

協力校の安城北中学校では、約7か月で2,186回の利用があり、時間にして8,806分の利用があった。また、特に定期テスト前に復習として利用する生徒が多く、日常的に利用する生徒は全校生徒の約2割に上ることが分かった。その結果、学習状況調査の質問紙における「家で、計画を立てて勉強している」という項目について肯定的な回答した生徒が、4月と比較して1月では25.6ポイント増加した。（詳細：様式3：協力校の報告）

中学校から報告された事例のなかで、引きこもり状態にあった不登校生徒の学習支援としてICTの活用ができただけでなく、ICTが学校と対象生徒をつなぐ媒体になった事例について、以下にまとめる。

生徒Aは、4月から学校に行くことができず、担任は12月になっても一度も会うことができなかった。しかし、学校ホームページから家庭学習ができることを電話で保護者と本人に伝えたところ、自宅のタブレットを使って学習を少しできるようになったと担任は報告を受けた。

そこで、担任が生徒Aと一緒に宿題をタブレットを使って勉強をしようと声をかけたところ、学校ではないが安城市教育センターのふれあい教室に生徒Aが来て会うことの約束ができた。

その後、2月に教育センターで初めて担任は生徒Aと会い、一緒にタブレットPCで学習をしながら学ぶ姿が見られた。その際、保護者が見守るなか互いに会話をし、今後の生活についても考える機会をもつことができた。

以上のように、ICTを生かした家庭学習が、学校生活にも反映し、効果的にはたらいっている成果がたくさん見られるようになってきている。

4. 本年度の課題をもとに次年度に向けて

(1) 取組内容(A)に関する課題

「自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営や支え合う環境づくり」について

課題：自己肯定感や所属感、自己有用感の高まりを、客観視できるデータのもとで手立てを打ちながら分析し、成果を広げていくこと

本年度、教師の多くが学級経営や環境づくりが、子どもの自己肯定感等が高めることにつながるという手応えを感じた。しかし、実際にその手立てがどのようなに効果として現れるのか詳しく分析する必要がある。今後は、全国学力・学習状況調査の質問紙調査だけでなく、Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）や横浜プログラム（YPアセスメント）なども活用して自己肯定感や所属感、自己有用感の変容を分析し、より効果的な手立ての具体を模索していくことが課題である。

(2) 取組内容(B)に関する課題

「目標を設定し、学び合う授業づくり」について

課題：学び合いの授業実践を広げ、共有できるようにすること

学び合いの授業づくりについては、子どもの意識の変化を見取り、手立ての有効性をより具体的にしていく必要がある。温かいかわり合いのある環境のもと、学び合いの授業づくりの具体的な方法が汎用化され、多くの教師で共有できたり、各教師が部分的に選択して利用したりできるようにする必要がある。実践モデルがいろいろな場所で有効活用できるようなシステムの構築やネットワークづくりが課題である。

(3) 取組内容(C)に関する課題

「学校と家庭をつなぐICTの活用や読書の推進」について

課題：ICTを活用した家庭学習や読書活動が、学校で生きようようにすること

ICTを利用した家庭学習の機会は今後も増加すると考えるが、ICTを使って家庭学習をしたことが、学校の授業で生かされるような授業の組み立てが必要である。同時に学校で培われた子どもの力が、ICT利用によって再び家庭での復習等の利用につながるようする必要もあり、学校と家庭とのつながりの構築が課題である。

図書館との連携や、学校司書の授業支援によって、家庭と学校における読書がより身近になるような機会は増えてきている。今後は読書してきたこと授業で生かされるなど、家庭での読書を学校で生かす必要があると考える。

このように、ICTを活用した家庭学習や読書活動が、学校と家庭の双方で認められるようにしていくことが今後の課題である。

(4) 次年度に向けた課題

- ・自己有用感、自己肯定感等が高めるためのデータを使った分析、システム化
- ・学び合いの授業実践を共有し参考にできるネットワークづくり
- ・家庭学習が生かされるICT活用授業モデルや、学校司書と共同し、読書してきたことが生かされる授業モデルづくりなど、学校と家庭をつなぐ活動の推進

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成30年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県安城市立安城北中学校
------	---------------

1. 当初の課題

(1) 全国学力・学習状況調査等から分析した本校の現状(平成29年度)

本校における平成29年度の調査結果は、国語、数学のいずれにおいても全国平均と同等か下回っていた。特に数学Bの正答率の低さから、与えられた課題の意味を理解し、筋道を立てて考察したり、表現したりすることを苦手とする傾向が見られた。

質問紙調査では「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦する」に対する肯定回答率が低く、自己肯定感や自己有用感につながる回答率が低かった。また、国語・数学ともに正答率の低い生徒は、家庭でテレビ視聴や、スマホ利用を長時間する割合が高い傾向が見られた。逆に、正答率の高い生徒は「読書が好き」と答える傾向にあった。

家庭での学習においては、「学校での予習・復習をしている」と回答した割合は、全国より高かったが、「自分で計画を立てて勉強している」割合は低かった。また、不登校生徒の割合も年々増加しており、学習形態の工夫する必要があると考えた。

(2) 現状の課題から取り組むべき内容

現状をもとに、課題の解決が必要であることについて、以下の3つを挙げる。

- ①学級づくりの場において自己有用感を味わわせるとともに自分が必要とする力に気付かせ、学びの意欲化を図ること。
- ②生徒の思考を軸にした単元構想のもと、生徒の主体性を重視し、対話活動を通して深い学びに至る各教科の授業づくりを中心に研究を展開していくこと。
- ③授業だけでなく、学校・家庭全ての生活における、生徒の主体性や学ぶ意欲の向上の基盤となる家庭学習力を高めるための研究を展開すること。

2. 本年度の取組内容のまとめ

課題をもとに本年度取り組んだ内容を以下の3つにまとめた。

- ①講師を招いて研修会を実施し、教科の域を超えて、自己肯定感や自己有用感を柱に教師が互いに授業や学級経営について話し合い、生徒のよさを認める場面の設定・具体的方法について検討し、研修を進めることで指導力向上に努めた。
- ②講師を招いて授業検討会を行い研修をすすめ、生徒の思考を軸にした単元構想のもと、生徒の主体性を重視し、教師支援(課題設定・発問・板書・座席表・ふり返り等)を検討し、対話活動を通して深い学びに至る授業づくりの研究を展開した。
- ③家庭学習力を高めるため、家庭学習支援ソフト(eライブラリ)の普及に努め、家庭学習の充実を図った。

3. 取組の成果の把握・取組状況からの検証

(1) 成果①：学級経営・支え合う環境づくりについて、職員の意識の向上を図ることができ、生徒の自己肯定感や所属感、自己有用感が高まった

講師を招き、学級経営・支え合う環境づくりについて講義をしていただいたり、学び合いの土台としての学級経営に視点を当てて実践をもとに指導をいただいたりした。支え合う温かな集団づくりに対する職員の意識を向上することができ、生徒の意識も少し変わってきた。

8月に招いた愛知教育大学の加納教授からは、「教師の肯定的な子ども観こそ最も大切な教師の資質・能力である」と指導を受け、教師からは「たくさん子どもの声を聴きたい、学級経営を見直したい」などと意識の向上がうかがわれた。この後2学期には3回にわたって講師を招いて授業公開をしたが、その都度学級経営についても評価をしていただき、教師の高い意識のもとでクラスづくりをすることができた。

調査の4月と比較した質問紙調査を1月に行ったところ「自分にはよいところがある」という質問について肯定的な回答をした生徒が2.9ポイント増加した。また「先生はあなたのよいところを認めてくれますか」という質問への肯定的な回答が6.9ポイント増加するなど、教員の意識の向上とともに子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感の高まりが見られる学校の状況も見えてきた。以下はその調査結果である。

	番号	質問項目		回答1 (%) 思う	回答2 (%) まあまあ	回答3 (%) あまり	回答4 (%) 思わない	結果	
自己有用感にかかわる項目	1	自分には、よいところがあると思いますか	4月	30.3	44.0	19.1	6.1	「回答1・2」が2.9Pアップ 「回答4」が減少	どの項目も肯定回答「1・2」が増えた傾向が見られた。
			1月	28.1	49.1	21.1	1.8		
	2	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか	4月	26.4	52.7	17.3	3.6	「回答1・2」が6.9Pアップ	
			1月	43.9	42.1	8.8	5.3		
	3	将来の夢や目標をもっていますか	4月	37.2	24.9	24.2	13.4	「回答1・2」が11.6Pアップ	
			1月	38.6	35.1	17.5	8.8		

(2) 成果②：学び合う授業づくりについて、子どもや教師の学び合うことの意識の向上を図ることができた

複数回にわたり学び合う授業についての授業公開をし、講師から指導をいただいた。以下は公開された授業で生徒が話し合ったテーマである。

- ・中2 道徳 「夢を叶えるために必要なものはなんだろう」
- ・中2 英語 「ペア、スチューデントティーチャーで過去進行形の復習をしよう」
- ・中2 社会 「中部地方に住みたくなるキャッチコピーを考えよう」
- ・中3 社会 「市に提案する要望としてふさわしいものは何か」

また、それぞれの授業では、学び合いの授業を価値付けていただく指導を受けた、以下はその指導でいただいた言葉の一例である。

- ・子どもの集中が見られた、こんな授業がたくさんあることが大切。
- ・学び合いに全員が参画している。今後が期待できる。
- ・一斉授業ではここまで書くことはできない。子どもたち同士で刺激をし合うからこそ、これだけの振り返りができた。 「愛知教育大学 土屋武志教授の授業実践後の言葉」

研修を進めていくなかで、対話型の授業形が学校全体に浸透してきた。また、授業後に協議会をもった上で、指導をいただく場を設けて指導を受けたことで、学び合う授業のよさを実感をもった教師が自信をもって次の授業に向かうことができた。

質問調査紙における授業にかかわる項目については、自分の考えが伝わるよう発表することに肯定的な回答をした生徒が19.3ポイント、話し合う活動に関する質問について肯定的な回答をした生徒が18.5ポイント増加したりするなど、生徒の授業における学びの意識が変わってきたと考えられた。以下はその結果である。

	番号	質問項目	回答率 (%)				結果		
			回答1 (%) 思う	回答2 (%) まあまあ	回答3 (%) あまり	回答4 (%) 思わない			
授業に関わる項目	7	1, 2, 3年生までに受けた授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があったと思いますか	4月	24.9	45.8	23.5	5.8	「回答1・2」が13.5Pアップ	どの項目も見られた。「1・2」が増えた
			1月	50.9	33.3	15.8	0.0		
	8	1, 2, 3年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか	4月	31.4	48.0	16.2	4.3	「回答1・2」が17.1Pアップ	
			1月	43.9	52.6	3.5	0.0		
	9	1, 2, 3年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか	4月	20.2	39.4	30.7	9.7	「回答1・2」が19.3Pアップ	
			1月	36.8	42.1	21.1	0.0		
	10	生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか	4月	32.5	45.5	17.0	5.1	「回答1・2」が18.5Pアップ	
			1月	49.1	47.4	3.5	0.0		

(3) 成果③：ICTを生かした家庭学習の充実を図ることができた

はじめに本校ホームページに家庭学習支援ソフトのバナーを貼り、本校のコンピュータ室において、パソコンやスマートフォンなどから家庭学習をする方法を伝えた。教員も定期テスト対策や教材の作成などで家庭学習支援ソフトを多く利用し、授業や宿題として活用しながら家庭学習を促した。コンピュータ室の放課後の開放も含めて多くの生徒が利用できるようにした。すると、各家庭においてパソコンやスマートフォンからホームページにアクセスして家庭学習をする生徒が多数見られた。

特に定期テスト前に復習として利用する生徒が多く、約7か月で2,186回（時間にして8,806分）の利用があり、約2割の生徒が日常的に利用していることがわかった。質問紙調査の「家庭学習」にかかわる項目について肯定的に回答した生徒が、調査の4月と比較して25.6ポイント増加しており、昨年度ほとんど利用がなかったICTを生かした家庭学習について、一定の効果があつたと考えられた。

	番号	質問項目	回答率 (%)				結果	
			回答1 (%) 思う	回答2 (%) まあまあ	回答3 (%) あまり	回答4 (%) 思わない		
学習習慣に関わる項目	6	家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか	4月	14.4	37.2	33.6	14.8	「回答1・2」が25.6Pアップ
			1月	40.4	36.8	14.0	8.8	

4. 今後の課題

成果をもとに以下のことを課題とし、次年度の事業を進めていきたい。

- ① 個の生徒のデータをもとに、自己有用感、自己肯定感を高めていくこと
- ② 学び合いの授業事例を校内で共有し、参考にできる事例を発信していくこと
- ③ ICTによる自宅での予習、復習が学校で生かされる授業モデルを構築すること

(様式 3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 30 年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知	番号	23
-------	----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市立品野中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

26, 27 年度の愛日地方事務協議会の委嘱を受け研究した時の成果はあった。しかし、愛知県の公立高校入試問題を解きこなす力までは身につけていない現状があり、基礎基本の定着をはじめ、生徒の「聞く、聴く、訊く」力が身につけていないという声が挙がってきている。また、基礎基本の定着という観点から、家庭学習についての取組にも改善の余地がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 現職教育の充実について

① 授業公開 Week

普段から授業を見合うよう職員に呼びかけている。なかなか見合えない現状がある。そこで、学期に 1 回「授業公開 Week」と銘打って、決められた週内に、活動案（指導案のこと。本校では生徒の活動を中心に据えるため活動案と呼ぶ）を書き、授業を見て、気づいたことをざっくばらんに話す期間を設けた。

② 全体会

職員が一堂に会し、授業について話す場を設けた。話すテーマは、教務主任と研究主任で相談し、学校の実情と合うものとした。また、品野ブロックの小中合同で研修を行った。授業の面で上越教育大学教授の水落芳明先生、人間関係作りの面で名城大学教授の曾山和彦先生をお招きし、学級づくりのコツを学んだ。

③ 公開研究授業

平成 25 年度から、年 1 回、市内の教員対象に授業を公開し、意見をもらっている。今年度は 11 月 2 日（金）に「学び合い」「道徳」「ICT活用」の 3 分科会を実施し、47 名の参加があった。

(2) 実際の授業について

本校では、1 授業時間内に他の生徒と関わりのある授業を「学び合い」と定義し実践を行ってきた。佐藤学氏が提唱する「学びの共同体」の市松模様の座席から、班、コ、の字で意見を共有する授

業形態や、西川純氏が提唱する『学び合い（二重括弧の学び合い）』の授業形態が中心である。また、ジグソーを取り入れた授業形態も見られる。ここでは、全国学テの数学Bで検証したこともあり、『学び合い』の授業形態について記すこととする。

① 課題の工夫

基本的には、授業開始後5分以内に課題に取り組むよう課題提示を行う。ただし、本時の中心課題に迫るために時間を要する際は、10分ほど時間を費やすこともあった。

課題の内容は、教科書の問題を解けるようにすることを基本とするが、なぜそうなるのかを3人に説明し、納得してもらえたらサインをもらうことをよく取り入れた。また、先に解を示して、「そうなる理由を中1の生徒（内容によっては小6の児童）に分かるよう説明しなさい」という課題とした。全員が課題を解決するための活動時間が30～40分になるような課題を設定した。そのためには、学力上位2割の生徒が12分ほどで解ける目安が妥当であり、教科の本質をいつも意識することが大切と考えた。

② 学習形態の工夫

課題を解決するために、友達や教師に聞きに行ったり、教卓に置かれている教師作成の解説を読んで理解したりするのも良いこととした。そのため、席を自由に移動しても良い。その際、問題が解けたという感覚も大切だが、自分で納得することを心がけるよう伝えた。また、クラスの全員が理解できることを目標とし、win-winの関係を築くよう指導した。授業の終わりには、復習や本時のまとめを行うのではなく、生徒の活動の様子を評価し、良かった点と改善点を伝えるようにした。



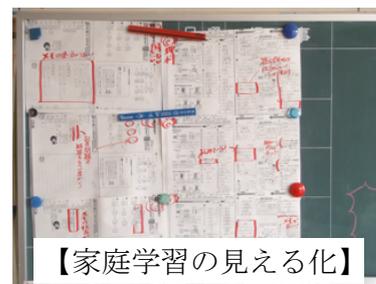
③ 活動案の工夫

一般的な指導案は、教師がどのように指導をしていくかが中心となりやすい。しかし、生徒の脳がどのように動くべきかを中心に授業を組み立てるべきと考え、生徒がどのような活動をしていくのかを明記することとし、活動案と名付けた。そして、授業を通し生徒の変容をビフォーアフターとして明記することで教師の願いをより明確にした。また、形式は、できるだけ簡略化し、活動案を書く抵抗感を薄めた。

(3) 家庭学習について

① 理想的な取組の見える化

家庭学習に対し、一生懸命取り組んだことの分かるものをコピーし、教師のコメントを書き込み掲示した。選んだ基準は、間違いに対し、気をつけるポイントを書いていたり、教師に対する質問が書いていたりしたものである。また、暗記できていなかったため、繰り返し書き込んでいるものも掲示した。



② 内容の吟味

パズル的な要素を含んだプリントや、授業の進度に応じつつ、興味を持って取り組みそうなプリントを家庭学習とした。

(4) その他

○ 講演会（10月18日）

理想とする教育を目指し、塾を創設、塾生の学習意欲を高める話が好評を博し、現在作家活動をしている喜多川泰氏に『希望の種』をテーマに学習する意味と未来が開けるために必要な話をしてもらった。講演後、質問が相次ぎ、途中で打ち切るほどであった。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 全国学テの数学Bの比較

主体的・対話的で深い学びを測定する物差しは、B問題の正答率で比較するのが妥当と考えた。そこで、2月上旬に2年生を対象に30年度全国学テの数学Bを実施した。

	1(1)	1(2)	1(3)	2(1)	2(2)	2(3)	3(1)	3(2)	3(3)	4(1)	4(2)	4(3)	5(1)	5(2)
3年	47.3	43.2	36.5	91.9	32.4	67.6	58.1	75.7	14.9	54.1	44.6	47.3	14.9	9.5
2年	50.0	28.2	37.2	92.3	33.3	62.8	78.2	78.2	51.3	65.4	37.2	55.1	15.4	17.9
全国	55.7	43.9	36.2	89.5	37.5	68.3	67.6	77.7	13.2	55.4	42.4	42.3	16.0	10.4

結果から、向上していると思われる点がいくつかある。また、このテストを実施した後、「今日みたいなテストがいいな。だから、定期テストもこの形式にしてよ」と言ってきた生徒がいた。この点も普通の授業内容とB問題が近いことが言えると思う。

(2) 授業参観者からの感想

本校の卒業生でフィンランドの大学院で教育学を専攻している方が、12月に授業を見学に来た。その方の感想から、主体的・対話的で深い学びの方向で授業が行われていると考える。

＜フィンランドの大学院生の感想＞（原文の一部）

～私がまず第一に感じたことは「こんなに優れた教育法と生徒の成長を促す接し方を実現できている学校が、日本に、そしてこんなに身近にあるなんて信じられない！」でした。日本の教育は先生が中心の、知識詰め込み型教育が主流で、知識を暗号のようなコードとして多く知っている生徒は他の国に比べて多数いても、その知識をテストでなく実際に使える生徒は少なかったのが現状です。フィンランドは世界で学力一位を何度もとっている国ですが、品野中学校の教育方法に非常に似ています。品中では「生徒が知識を覚えるのではなく、理解する、使える」に重きを置いて授業を進めておられると思います。～

4. 今後の課題

(1) スキルアップ

学び合いを成立させるためのスキルを明確にし、非常勤講師も含めた職員全体のスキルアップが必要と考え、現職教育を計画する。

(2) 課題の質的向上

まだ単元を通した課題の設定に甘さがある。また、1授業時間においても、その教科の本質に迫る課題設定になっていないことがある。その点が全国学テにも現れている。「活動あって学びなし」に陥らないよう気をつけていきたい。

(3) 教師の学び合い

職員室内でのコミュニケーション不足が(1)を起こしているとも考えられる。職員室で授業の会話が気軽にできるような雰囲気作りも必要である。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成30年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県安城市立桜井小学校
------	--------------

1. 当初の課題

(1) 全国学力・学習状況調査等から分析した本校の現状(平成29年度)

本校の平成29年度の調査結果は、国語A・B、算数A・Bのすべてで全国平均を下回った。国語Aの「漢字の読み書き」、国語Bの「条件に合わせて記述すること」、算数Bでは、「割合」の正答率が特に低く、算数Aにおいては多くの分野で全国平均を下回り「基本的なことがら」が定着していないということが分かってきた。

また、質問紙調査の結果からは、「家庭での学習時間が短く、計画的に学習できない」「家で復習をしない」「就寝時刻が一定せず、テレビ・ゲームなどに充てる時間が多い」等の回答率が高く、家庭での学習習慣や生活習慣に問題が見られた。加えて、自己肯定感や友達や教師とのかかわりに関する質問の回答について、全国平均と比べて低い傾向が見られた。

(2) 現状の課題から取り組むべき内容

現状をもとに、喫緊の課題として解決の必要があることを以下の3つにまとめた。

- ①友達や教師に認められる活動を通して、学級での所属感、自己有用感、自己肯定感を高め、互いに認め合いながら、何事にも粘り強く諦めずに取り組む児童や学級集団を育てること。
- ②児童の実態を把握し、温かくかかわり合いのある授業構想のもと、明確な目標を設定する。仲間と考えを深め、深まった学びの足跡を文章や図表で表したくなる授業を行い、学びが他の教科や生活に生きる感覚を味わわせること。
- ③学校と家庭をつなぐ媒体としてICTを有効活用し、家庭学習支援ソフト(eライブラリ)の普及を図り、家庭での学習習慣の確立をめざすこと。

2. 本年度の取組内容のまとめ

課題をもとに本年度取り組んだ内容を以下の3つにまとめた。

- ①自己肯定感や所属感、自己有用感を高める学級経営について、講師を招き教師の話し方、環境の作り方など、学級経営に生かせる具体的な研修を進めた。授業公開においては学級経営の部分においても講師に価値付けしていただいた。
- ②児童の実態を把握し、実態に合わせた目標を設定し学び合う授業づくりについて講師を招き、授業研究会を行った。目標設定の仕方、学び合いの様子や具体的な方法、振り返りの仕方や内容について研修を進めた。
- ③ICTを活用する取り組みについて、家庭学習支援ソフトを普及させ、自主的に家庭学習に取り組む習慣を身に付けさせた。

3. 取組の成果の把握・取組状況からの検証

(1) 成果①：講義や協議会などを繰り返し、学級経営に対する職員の意識の向上を図ることができた

本校では4回にわたり講師を招き、学級経営について講義をしていただいたり、学級経営に視点を当てて公開した授業の指導をしていただいたりした。子どもの自己肯定感や所属感、自己有用感を高めることへの手立てを講師から得ることができた。以下は、講師の先生から学級経営・支え合う人間関係づくりに関することについて指導していただいた言葉の一部である。

「愛知教育大学 加納教授による授業公開後の講義から」

今回の授業で45分間ずっと子どもたちが考えていた。これは学級経営あってこそ、教師が学級づくりのなかで、自己肯定感の確立がなされているので、話し合いのなかで参加できていない子がいない。そこでの教師の出が、自ら学びに向き合っていく子を育て、人間性を高めていく。そのような学級づくりが大切で、全員で広げていってほしい。

「日本大学 黒田准教授による授業公開後の講義から」

学級に自分の居場所があり、支え合っている関係性があれば、子どもはなんとか頑張ることができる。先生が「かっこいいね」ではなく、子どもがあの子(自分)「かっこいい」といえる学級づくりをしてほしいし、それが多くの先生方の授業で見られるようになってきた。

また、指導を受けた教師の感想からは、「自分の意見を心置きなく言える場を学級の中でつくっていきたい」「たくさん子どもの声を聴きたい、学級経営を見直したい」などと、繰り返し講師の指導を受け、学級経営のよさや自身の子どもの関わりを価値付けてもらったことで、意識の向上が見られ、前向きに自信をもって毎日子どもと向き合う感想がたくさん見られた。

(2) 成果②：学び合う授業づくりについて、児童や教師の学び合うことのよさへの意識の向上を図ることができた

本校では合計75学級が、学び合う授業についての授業公開をし、大学教授等からの指導を繰り返しいただいた。研修を進めていくなかで、学び合いの授業の形が学校全体に浸透してきた。また、授業後に協議会をもった上で、指導をいただく機会を何度も設けたことで、学び合う授業のよさを実感をもって学び、自信をもって次の授業に向かうことができた。以下は公開された学び合いの授業実践の一例である。

<公開授業例1> 小1 生活科授業「のびのび秋ランドへようこそ」について

<授業の内容> 秋の自然を使って夢中になって秋ランドをグループで制作している子どもたち。なかなかうまくいかない児童がいるときに、先生が声をかけると全員が寄って来て問題を解決するために「もっと楽しい秋ランドにするためには」というテーマでみんな話し合い。また活動を進めていった。

授業後の教師による協議会では、「Aのつぶやきがヒントとなり、学び合いが進んでいた」「BとCの感じる秋の違いを、子ども同士で説明したため、各自が本当に作りたい秋に寄り添えた」などと子どもの姿をもとに教師が学び合った。その後、講師から、教師が子どもたちの困り感を一緒に考えたことのよさや、話し合いにおける言葉を正確に伝えさせる教師の声かけの方法など、具体的な指導を受けた。教師は、学び合いの授業のよさを実感し、次の授業につなげる具体的な手立てを見出していった。

＜公開授業例2＞ 小5 算数科授業「みんなですっきり面積比べ」について

＜授業の内容＞ 算数の面積の授業で、サンカークさん、シカークさんの畑の面積を比べた。4年生で学んだ長方形や正方形の求積公式を使って三角形、平行四辺形、台形などいろいろな四角形の面積を求めた。平行四辺形を移動させて長方形にして求める自分の考えを伝えたり、友達に認められたりするなかで、新しい面積の求め方を学んでいく児童が見られた。

授業の振り返りにおいて、児童は「たくさんの子がわたしの考え方を使って面積をもとめていたからほっとした」「Aくんの考え方は思いつかなかった。分かりやすいと思った」と記述するなど、学び合うことのよさを実感した児童の姿が見られた。

授業後の講義では、講師から、「自分を自分らしく友達に表現してもいい温かな空間があった」「対象と対話し続ける子が見られ、これこそ深い学びにつながる」などと、学び合いの授業を価値付けてもらいながら、次の授業につながる指針もいただいた。授業後の教師の感想の一例は以下のとおりである。

「低学年でも似たような学び合いの授業を今度挑戦してみたい。」
「自分と違う考えに触れ、考えを深めたり広げたりできる授業をとりいれていきたい。」
「グループワークは自分はあまりできていないところであるので、とても勉強になりました。」

このように学び合うことのよさを実感した子どもの姿をもとに、講師により繰り返し授業を価値付けてもらうことで、今後の授業に前向きに取り組もうとする姿や、学び合う授業の価値を感じる姿が見られた。

(3) 成果③：ICTを活用し、自宅で学習する機会を増やすことができた

本校では、コンピュータ室でパソコンやスマートフォンから家庭学習をする方法を学び、学校ホームページのバナーから学習支援ソフトを活用して学習する機会を設けた。その後、自宅で学ぶ機会があることを以下のように本校ホームページの記事で紹介し、ICTを使って学校だけでなく自宅でも学習できるように促した。

4年生がコンピュータを活用した授業を行いました。
家庭学習支援ソフト「eライブラリアドバンス」のドリル学習に取り組みました。学習したい教科や単元を選び、4年生のまとめとして、繰り返し学習しました。家でもぜひ挑戦してみてください。このホームページの左側のバナーからログインできます。



同時期に保護者懇談会を開き家庭学習を促したところ、各家庭においてパソコンやスマートフォンからホームページにアクセスして家庭学習をする児童が多数見られた。勉強が苦手な2年児童Aは、1年生の問題を保護者と一緒に学習し、保護者ともに学習に取り組むきっかけづくりとなった。また、授業ではあまり積極的に発言することのない6年児童Bが、ほぼ毎日ICTによる家庭学習に取り組んでいることを学習履歴から知り、担任が本人の努力を認めることができた。このように、昨年度はほとんどなかったICTを活用した家庭学習が、数多く見られるようになってきた。

4. 今後の課題

成果をもとに以下のことを課題とし、次年度の事業を進めていきたい。

- ①児童のデータをもとに細やかに一人一人の自己有用感、自己肯定感を育むこと
- ②学び合いの授業実践を校内で共有し、参考にできる事例を増やしていくこと
- ③家庭学習が教室で生かされるICT活用授業モデルを構築していくこと

(様式 3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 30 年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知	番号	23
-------	----	----	----

協力校名	瀬戸市立下品野小学校
------	------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

瀬戸市では、平成 32 年度より全小中学校において、中学校ブロック別の小中一貫教育を進めていくこととしており、各中学校ブロックにおいて準備が進められている。その一環として、今年度は、各中学校ブロックにおいて、共通の「めざす子ども像」や「重点努力目標」を設定した。

推進協力校 4 校（以下品野ブロック）で設定しためざす子ども像は以下の通りである。

- ・ 授業や行事など様々な場面で学び合う子
- ・ 多くの人々と関わりながら地域の一員であるという自覚をもつ子

これまで、品野ブロックでは、「学び合い」を取り入れた授業を軸に、各校において児童生徒の学力向上を目指した取組が行われてきた。各校で成果が得られている一方、基礎基本となる知識技能の定着に課題が見られた。

課題を解決するためには、品野ブロックの 4 校が目的を共有し、これまで行われてきた「学び合い」の成果を活かしつつ、様々なアプローチの仕方で課題の解決に迫ることが有効であると考えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

品野ブロックにおける「学び合い」の授業を推進するために、先進校である品野中学校の取組を知ることから始めた。授業参観や研究協議会への参加を、学級担任を中心として積極的に行った。本校においては、6 月公開日に 10 名、11 月公開日に 8 名の教職員が参観を行った。品野中学校で実際に行われている「学び合い」の授業を目にすることができ、中学校入学までに現在担任している児童に対して何を身につけさせたらよいかを考えるよいきっかけとなった。

また、基礎基本となる知識・技能の定着に向けて、現職教育推進委員会の組織として「基礎学力定着委員会」を立ち上げ、ICT 機器を活用し、短時間で基礎基本となる知識・技能を反復する学習方法（フラッシュ教材の活用）や、ユニバーサルデザインの理念に基づいた視覚支援の在り方について検討を重ねた。

そして、1 年間を通した取組を検証や児童の実態把握のために、今年度は 4 月と翌年 1 月か

ら2月にかけて全国標準学力検査（教研式CRT検査）を実施することとした。

（2）家庭学習の充実

小学校では、基礎基本となる知識技能を定着させるために、家庭学習についてのあり方を検討したり、家庭学習を通じた学習習慣の定着の大切さを保護者に伝えたりした。本校においても、翌日の学習用具準備や、家庭学習への取組を児童が保護者と一緒になって取り組むよう、年度当初に各家庭へ依頼をするとともに、保護者、学級担任がともに連絡帳への確認のサインを行うこととした。

（3）教員の指導力向上

品野ブロックにおいて、学力向上に対する取組を推進するにあたり、各校教員の指導力向上は欠かせない。そこで、小学校間、小中学校間の取組を互いに知り、自校での取組を見直すとともに、小中合同での研修会や研究授業、情報交換、そして乗り入れ授業などを通して、教員の指導力向上を図っていくこととした。

教員の指導力向上に向けたブロック内での合同研修、研究授業参観、乗り入れ授業のうち、本校が中心となってかかわったものは以下に示すとおりである。

<合同研修>

10月15日 大阪市立大空小学校視察

11月26日 品野ブロック合同研修会

すべての子どもが「わかる」「できる」授業のために
—課題のあり方とヒドゥンメッセージ—

講師 上越教育大学大学院学校教育研究科 教授 水落 芳明

<研究授業参観>

11月26日 授業公開

2月15日 授業公開

<乗り入れ授業>

11月19、20、29日

本校小学校栄養教諭と中学校技術・家庭科教員による合同授業

（対象は品野中学校1年生）

3. 取組の成果の把握・検証

（1）基礎基本となる知識・技能の定着と、学び合いを取り入れた授業の推進

品野ブロックで学力向上を掲げ、目の前の児童生徒を見つめ直し、何が欠けていて何が必要かということを全教職員で検討する機会を得たことは大きな成果である。また、学力向上のための授業改善に向け、本校においてもこの一年取り組んだことは、子どもたちや職員に随分定着してきた。教材の開発には多大な労力が必要だが、1年間取り組み続けてきたことで質、量ともに多くを蓄積することができた。特に、基礎学力定着に向けたフラッシュ教材は、多くの教材が開発され、今後も継続して使用していく予定である。

12月に実施した学校評価アンケートでは、「学力向上、基礎基本の定着」に対する回答のうち、82%が「身につけている」「やや身につけている」であった。保護者の多くに、本校における基礎学力定着に向けた取り組みを評価していただいた。ただし、数値としては前年度

より微減であるため、検証が必要である。また、本校における「ICT活用、学び合い」に対する回答のうち、70%が「よい」「ややよい」であった。これは、前年比10ポイント以上増加であり、保護者の多くに、本校の取り組みを評価していただけたと考えられる。

(2) 家庭学習の充実

12月に実施した学校評価アンケートでは、「家庭学習の習慣が身についている」という項目に対して、児童、保護者ともに8割強が「十分身についている、概ね身についている」と回答した。連絡帳にサインを行うという取り組みも、8割強程度の家庭に協力していただけている。

家庭学習の充実を目指すことは、単に学習習慣の定着のみならず、家庭と協働して児童生徒の成長を促すということにつながる。「取り組みたくなる家庭学習」そして「効果的な家庭学習」について追求し、児童生徒の自学自習の取組へつなげたい。また、保護者との協働も必要不可欠である。継続して必要性を伝えていきたい。

(3) 教員の指導力向上

実際に各校を行き来し、その取組を目にすることは本校の教員にとってよい刺激となった。特に、本校が初任校となる教員や、中学校経験のない教員にとっては、義務教育を終える段階までに身に付けさせたい資質・能力を明確にもつことができる良い機会となった。また、連続性や系統性に配慮した授業の実施、専門性を生かした授業の実施、児童生徒に対する理解の深まりなど、得られるものは多くあった。

しかし、「学力」そして「学び合い」の定義、考え方については、各校、もしくは個人で解釈が違い、その調整の難しさを感じた。品野ブロックとしてのめざす子ども像をもう一度見つめ直し、その育成のために何が必要かという観点で、きちんと軌道修正する必要があると感じた。

4. 今後の課題

今年度の取り組みを通して、課題として挙げられることが2点ある。

1点目は、前述の通り、小学校における学力の定義に対して、校内において多様な解釈が生じてしまったことは修正すべき課題であった。学習指導要領の改訂もあり、基礎学力を漢字や計算だけに限って考える従来型の発想では、児童の学力定着を促すことは困難である。現職教育推進委員会等の機会を利用して、校内における学力の定義を統一していく必要性を強く感じている。

2点目は、学力定着に向けた学習規律の向上である。今年度取り組んだ学力向上に向けた取り組みのうち、「学び合い」に関わる授業で、協働できるものの深まりが見られないという場面が多々あった。話し合いであれば、話型を用いたり、発問を精選したりすること、並びに考える楽しさを味わわせられるような課題設定の工夫によってさらに子どもたちの思考を深めていく必要性を感じている。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市品野台小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校の全国学力学習状況調査の結果から、これまでと比べ児童の学力二極化が広がっている様子が見られる。そのため、個に応じたきめ細かな指導が必要であること、各教科において、学習に取り組む意欲が湧いてくるような学習問題の提示のしかたや分かりやすい授業実践を教員間で共有すること、一人ひとりの児童が粘り強く取り組めるような支援のあり方を探り出していくことなどが課題ではないかと考えた。

<課題>

- (1) 基礎基本となる知識・技能の定着に課題がある。
- (2) 家庭における学習への取り組みに課題がある。
- (3) 教員の授業改善に取り組む必要がある。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着に向けて

① 業前の時間を活用した朝の活動、がんばりテスト(漢字・計算)の設定

朝の活動20分間では、朝読書、読み聞かせ、外国語活動と組み合わせて、基礎基本の内容である漢字・計算の内容にも取り組んだ。加えて、各学期に学習のまとめとして、がんばりテスト(漢字・計算)を行った。満点賞(100%)、がんばり賞(90%)の児童には賞状を授与した。基礎基本の定着を重視した学習活動を通して、確かな学力の定着を図った。

② 算数科における少人数指導の実施

2、6年生の算数の授業において、少人数指導で行い、児童がどこで躓いているのか、質問はないかなど、きめ細かな指導を心掛け子どもたちのわかった時の喜びにつながるよう取り組んだ。

③ 教師の授業改善・指導力向上のために

指導方法の工夫改善を図るため、品野ブロックで開催される研究授業へ積極的に参加し、職員間で情報共有をした。学校公開日での訪問、研究授業、協議会への参加することができ、教師の指導力の向上につなげるためのきっかけとなった。

(2) 家庭における学習への取り組み向上に向けて

- ① 家庭教育の充実として、右のように学年通信等を活用し、情報発信を行った。
- ② 家庭学習への取り組みが芳しくない場合は、保護者・児童ともに取り組みを促した。
- ③ 家庭読書期間を設定し、家庭での読み聞かせなどきっかけ作りを通して読書に親しみを持てるように促した。

お願い

- ・ 長い夏休みです。お子さんと、時間や取り組む内容など、計画を一緒に立てて、学習やお手伝いに取り組むことができるとよいと思います。
- ・ 日誌と計算ドリルの〇付けにご協力ください。お子さんの得意不得意が分かりますので、ぜひ、定着するまで復習していただけたらと思います。
- ・ 計算がずらさずできるようにするまで、根気よく、毎日計算カードの練習を続けさせてください。寄り添って見ていると、苦手なカードや指に頼っているカードなどが分かります。繰り返し練習すれば、どの子もずらさずできるようにします。よろしくお願いいたします。

(3) 教員の授業改善に向けて

- ① オープンスクールの学校施設と小規模校の特性から、児童の個性を伸ばさせつつ社会性やコミュニケーション能力の向上に努める。小規模校のメリットを生かし異学年交流授業、教科担任制などの授業に取り組んだ。
- ② 各教科の学習活動において、「学び合い」の活動を取り入れ、能動的に学ぶ児童の育成をめざし、どのような場面で取り入れることができるのかを追求していく。学習活動の終わり(1時間、一日、単元など)に振り返りの場面を設定し、感じたことや考えたことなどを伝えた。
- ③ 国語科の学習指導を中心に、「聞く」「話す」「読む」「書く」力の育成を図る。また、国語科以外の教科等においても、教科の特質に応じて学び合う(伝え合う)活動を積極的に取り入れた。また、学級内だけでなく、児童会や委員会活動、縦割り班活動、学校行事等、さまざまな機会を利用し、自分の気持ちや考え・気づきを伝えあう場面を設定した。
- ④ 品野中学校における授業や研究協議会へ参加したり、T2として授業を行ったりする。それを通して小中一貫教育の観点から中学生の実態を把握し、小学校において身に付けさせたい学力を見つめなおすことによって、授業改善の一助とした。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) がんばりテスト 賞状獲得 「満点賞(10割)+がんばり賞(9割)」

	1年生 13人		2年生 20人		3年生 11人		4年生 13人		5年生 13人		6年生 14人	
	国	算	国	算	国	算	国	算	国	算	国	算
1学期	100%	100%	70%	65%	82%	82%	85%	69%	77%	15%	86%	64%
2学期	100%	100%	60%	85%	82%	91%	69%	77%	71%	43%	79%	86%
3学期	92%	100%	84%	95%	82%	82%	85%	92%	85%	23%	71%	71%

各学年のがんばりテスト(国・算)の賞状(正答9割以上)の獲得率では、学年が上がるに獲得率の低下傾向が見られた。しかし、各学年において2学期に落ち込みが見られるが3学期には持ち直してくる傾向も多くの学年で見られた。教師のきめ細かな指導や家庭学習の習慣の定着によって、基礎基本の習得に近づいているのではないかと思われる。学校評価アンケートの中にもがんばりテストを続けてほしいという保護者の意向(約9割:とてもそう思う+そう思う)もあるため、次年度も継続して、学習習慣など強化につなげられるように取り組んでいきたい。

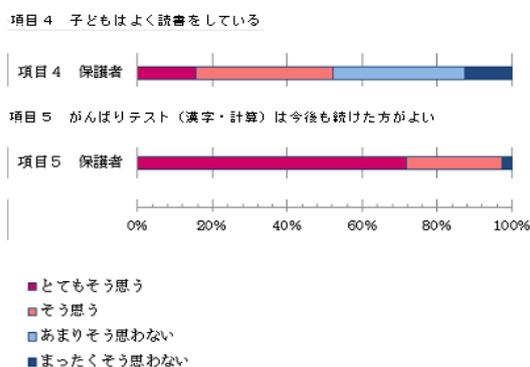
(2) 2・6年生「算数科」少人数指導のアンケート結果

①少人数で行う授業は、分かりやすいですか。	2年生 (19)	6年生 (14)
よくわかる	42%	50%
どちらかというとわかりやすい	47%	29%
あまり変わらない	11%	21%

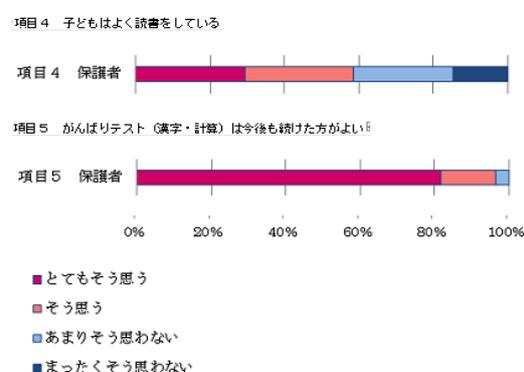
アンケートの結果からも「よくわかる」「どちらかというとわかりやすい」を合わせると多くの児童が理解できていると答えている。きめ細かな指導から児童の理解や自分の意見を発表できる場作りにつながっていると考えられる。

(3) 家庭における学習への取り組み向上にむけた読書活動

平成 29 年度保護者アンケートより



平成 30 年度 保護者アンケートより



読書月間の取り組みでは、家庭読書を勧め、各家庭にも協力していただいた。例えば、読み聞かせを家族間相互で行うなど様々な呼びかけを行った。その結果、昨年は約 5 割(とても思う・そう思う)だったが、今年は約 6 割近くの保護者が本を読んでいると答えた。

4. 今後の課題

(1) 基礎学力の定着をめざして

学習指導要領にもある新しい学力観「主体的で深い学び」により近づけられるよう授業の進め方や学んだことを生かすことができる学習を追究していきたい。

(2) 学習習慣の定着に向けて

全国学力学習状況調査から見えた課題「家庭での学習は 30 分以下・しない状況」は本校の課題でもある。課題の量を「学年+10 分間」とするなど持続可能な児童の集中力を念頭に置き、楽しそう、取り組んでみたい、やってみたいと思えるような課題の開発を職員間で共有できればと考える。

(3) 教員の更なる指導力向上をめざして

目の前にいる子どもたちのためにどんな力が足りないのか、どのような方法でアプローチすると有効なのかなど、教員間でいつでも話題にできる環境作りをめざしていきたい。また、学力向上につながる研修に参加できる機会を数多く作ることができるように努めていきたい。

(様式 3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	愛知県	番号	23
-------	-----	----	----

協力校名	愛知県瀬戸市立掛川小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校のここ5年間の全国学力学習状況調査の結果を見ると、国語、算数ともに全国平均と同程度かやや上回る正答率であった。しかし、国語では文章を正確に早く読み取ることや与えられた条件に合わせて文章を書くことが必要となる問題の正答率が低く、算数では論理的に説明することが必要となる問題の正答率が低かった。基礎基本の充実を図ることはもちろんであるが、深い学びにつながる指導が必要であることが明らかとなった。また、本校は少人数学校の特徴を生かしたきめ細やかな指導を行っているが、個人差が大きく、一層きめ細かい指導や学び合い学習で個を伸ばす必要があると考える。

2. 協力校としての取組状況

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と学び合いを取り入れた授業の推進

① 業前の時間を活用した掛川タイムの設定

業前の時間(8:35~55)に、「朝読書」「外国語活動」と組み合わせて基礎基本の内容である漢字・計算学習を主とした時間を設定し、全校で取り組んだ。

② 漢字コンクール・計算コンクールの実施

毎学期末に、漢字コンクール、計算を行った。各学年の基礎基本の問題を50問程度出題し、全員が90点以上が取れることを目指した。

③ 学び合いを取り入れた授業の実践

体験的・問題解決的な学習を積極的に取り入れ、学び合いを取り入れた授業作りを工夫した。

(2) 家庭における学習への取り組み向上に向けて

① 家庭学習の充実

家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう、次のことを行った。

- ・ 年度初めのPTA総会にて、保護者に向けて新学習指導要領について説明し、本校においても家庭での学習習慣の定着を今年度の目標のひとつにしたい旨を話し、協力を依頼した。
- ・ 宿題のパターン化に心がけた。毎日、できるかぎり同じ様式で、同じ時間でできるような宿

題を出すように心がけ、家庭学習が生活習慣の一部として定着するようにした。

- ・ 宿題のチェック表や連絡帳への確認のサインを家庭へお願いし、取り組みが芳しくない場合は、保護者への協力を依頼した。

② ゲーム・スマホ依存についての学習会

- ・ 10月の学校保健委員会にて、医学博士の磯村毅氏を招き、児童、保護者、職員に「あなたは大丈夫？気づかぬうちにネット依存」という題で、お話をいただいた。ゲームやスマホ等のネットを長時間やっている児童は、家庭学習時間をしっかりとっていても、学習成果が現れないという具体的なデータに基づいたお話は、聴く者に危機意識を持たせることができた。



(3) 教員の授業改善に向けて

① 現職教育委員会による取り組み

- ・ 授業研究を年に3回行った。その中でプログラミング学習を生かした学び合いの学習、物語を演技化するためにどうしたらよいかを話し合う学習の授業が行われた。
- ・ 学び合い学習を深めるために、話し合い活動を活発化する方法について教員一人一人が1年間自主研修に励み、授業で実践した。



② 品野中ブロック合同研修会（名城大教授 曾山和彦氏 講演会）

- ・ 平成31年1月7日に、品野中ブロック合同研修会として、名城大学教授曾山和彦氏を招き、「学級という機を織る～気になる子どもたちへの支援と学級作り～」という演題で講演をしていただいた。



③ 公開授業への参加

- ・ 11月26日と2月15日の下品野小学校の授業公開に本校職員が参加した。

3 取り組みの成果の把握・検証

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と学び合いを取り入れた授業の推進

- ・ 業前の時間を活用した朝学習（掛川タイム）や、学期末の漢字コンクールの事前指導、事後指導で漢字、計算の学力を身につけることができた。
- ・ 学び合いの学習を進め、児童は、自分の考えを発表する、友達の意見を聞く、困っている友達を助けるというような姿勢が身につけてきた。この姿勢はお互いがお互いを大事にする気持ちを育成することにもつながった。

(2) 家庭における学習への取り組み向上に向けて

① 家庭での学習習慣の確立

「学校評価のための教職員アンケート」では、「学習習慣の確立や学習意欲の向上を図っている。」という項目において、伸びが見られた。（下表）

	平成 29 年度	平成 30 年度
できている	33%	50%
どちらかと言えばできている	45%	50%
どちらかと言えばできていない	22%	0%
できていない	0%	0%

② ゲーム・スマホ依存についての学習会

事後アンケートでは、保護者から次のような声が聞かれた。「ネット依存について知ることができ、今後、子どもへの対応について考えたいと思う。」「今まさに抱えている問題で、子どもの心に届いたのではないかと思います。」「親子共々しっかり話し合っ、ネットとの良い付き合い方ができるようになりました。」これらの声から、成果はあったと考える。

(3) 教員の授業改善に向けて

① 現職教育委員会による取り組み

- ・ 授業研究を年に3回行った。算数の授業では、プログラミング学習を取り入れた授業が行われ、児童は目的通りのプログラミングを作るにはどうしたらよいかという話し合いを熱心に行った。また、国語の授業では児童は物語を演技化するにはどうしたらよいかという話し合いを熱心に行った。

② 品野中ブロック合同研修会（名城大教授 曾山和彦氏 講演会）

- ・ 気になる子が笑顔になる学級作りの理論や具体的な方法について研修を深めることができた。また、本校で毎月1回 SST として行っているアドジャンの取り組みが話し合い活動で有効であることが確かめられた。

③ 公開授業への参加

- ・ 先進的な ICT を取り入れた学習についての理解を深めることができた。

4. 今後の課題

(1) 基礎基本となる知識・技能の定着と学び合いを取り入れた授業の推進

- ・ 漢字、計算など基礎基本となる知識・技能に個人差があり、さらにきめ細やかな個にあった指導が必要であると思われる。
- ・ 学び合い学習を深めるために長期的な視野に立って研究を進めていく必要がある。

(2) 家庭における学習への取り組み向上に向けて

- ・ 保護者のアンケートでは、家庭学習に関する項目に伸びは見られなかった。引き続き、家庭と協力し、取り組んでいきたい。

(3) 教員の授業改善に向けて

- ・ 「学力」そして「学び合い」の定義、考え方については、各校、もしくは個人で解釈が違い、その調整の難しさを感じた。品野ブロックとしてのめざす子ども像をもう一度見つめ直し、その育成のために何が必要かという観点で、きちんと軌道修正する必要があると感じた。